

「犯罪×犯罪（クرائمクرائم）」

【登場人物】

マスター（荒原）

空き巣（春子）

詐欺師（被害者）

食逃げ犯（ヨネ）

強盗（雄二）

ストーカー（ウェイター）

痴漢（店員）

警官（スリ師）

爆弾魔（男）

偽爆弾魔

【プロローグ】

明転。場所はカフェ・アラ・リーザ。

マスター、カウンター後ろにいる。詐欺師と食逃げ犯が同じテーブル席に座っている。ウェイター、詐欺師の方をじろじろ見たり、お冷を足しにいたりする。

詐欺師「本当にお婆さんには長生きしてもらいたいです」

食逃げ犯「そうかそうか」

詐欺師「そんなお婆さんに本日も紹介する商品はこちらです（アタツシユケースから50 Om ペットボトルを取り出す）。すごい幸せの水、『スーパードラッグ』です！」

食逃げ犯「ほーう」

詐欺師「このスーパードラッグウォーター…（ここからマイム）」

空き巣と強盗、上手（入口）から扉を開けて入る。

マスター・ウェイター「いらつしやいませ」

空き巣と強盗、奥のテーブル席に座る。ウェイター、そこに近づく。

空き巣「私、カプチーノ」

ウェイター「かしこまりました！」

強盗「えっと俺は…」

空き巣「さっさと決めなさいよ」

食逃げ犯「そんな効果が。すごいお水だねえ」

詐欺師「はい。そして今ならお値段なんと…」

マスターにスポットライト。

マスター「皆さんこんにちは。私、このカフェ・アラ・リーザのマスター、荒はーらでございます。さてこのカフェ・アラ・リーザ、大変ありがたいことに常連のお客様も少なからずいらつしやいます。しかし、そのお客様の中には少々特殊と言いますかなんと言うか、あまり大声では言えないお人が…例えばあの、お客様」

詐欺師にもスポットライト。

マスター「先ほどからお婆さんにニコニコと愛想良く商品を勧めているあの女性：実は犯罪者です」

明転。

『ジャー』という音とともに下手（トイレ）から電話をしている痴漢が出てくる。

痴漢「はい、分かりました店長。ではまた後ほど」

痴漢、電話を切りコーヒーカップが残ったカウンター席に座る。

痴漢「マスター、最新号ありますか？」

マスター「はい。どうぞ」

マスター、雑誌を痴漢に渡す。痴漢、雑誌を読む。マスターと痴漢にスポットライト。

マスター「今、雑誌を読んでいる一見クールなこの男性：彼も犯罪者です。そして読んでる雑誌は、エロ本です」

明転。

空き巢「ちよつとまだ？」

強盗「うーん：甘い系かさっぱり系か：春子はなんだっけ？」

空き巢「カプチーノ」

強盗「そっか。よし、じゃあ俺はチーズケーキ」

空き巢「飲み物じゃないの？」

ウェイター「かしこまりました！」

ウェイター、詐欺師の顔を見た後キッチンに戻る（下手からはける）。

強盗「良いじゃん別にケーキだって」

空き巢「うん、ていうかさ、悩み過ぎだよ。ホント雄二って結婚する前からあれだよね。

なんか：鈍くさいっていうか：マヌケ面だよね」

強盗「マヌケ面ってなんだよ。性格と関係ないじゃん」

空き巢「普段からもつとしつかりしなさいってことよ。だからあんたの方はいつも失敗ばかりなのよ。私と違って」

空き巣と強盗、マイムで言い合い（喧嘩）を始める。※最終的に空き巣が強盗にビンタをする。マスター・空き巣・強盗の3人にスポットライト。

マスター「今、痴話喧嘩をしているあそこの若夫婦。はい、犯罪者です。おっと、忘れていました」

食逃げ犯にもスポットライト。

マスター「あのお婆さんも、犯罪者です」

マスターにだけスポットライト。

マスター「本日のお客様は全員犯罪者でした。あ、ちなみに」

ウェイター、カップを持って出てくる。ウェイターにスポットライト。

マスター「彼も、犯罪者です」

マスターにだけスポットライト。

マスター「彼らは周りのお客様方が犯罪者であることを知りません。まあもしかすると、薄々感づいている鋭い方もいらっしゃるかもしれませんが」

明転。

警官が上手から入ってくる。マスター以外の人物、警官を見てそわそわする。

警官「こんにちは」

マスター「どうもお巡りさん。パトロールお疲れ様です」

警官「いえいえ」

マスター「いつものでよろしいですか？」

警官「ああいやいや、今日はちよつとね、見回りにきただけだから」

マスター「そうですか」

警官「最近この辺犯罪が多いからね。気を付けてほしくて」

ウェイター「へーそうなんですかー」

詐欺師「多いんですね」

空き巣「あんまり意識したことなかったけど」

強盗「うーん、嫌な世の中になったなあ」

食逃げ犯「そうじゃのう」

痴漢「まったくです」

警官「皆さんも、用心してくださいね。もしかしたら…この中にもいるかも知れないんですから、犯罪者が」

間

マスター以外の人「まさかー！」

警官「ではマスター、私はこれで」

警官、上手からはける。全員にスポットライト。

マスター「もう一度言います。彼らは犯罪者です」

マスターと上手入口にスポットライト。警官、戻ってきてスポットに入る。

マスター「そして彼もまた犯罪者です」

明転。

警官、はける。マスター、テレビを付ける。

ナレーター『ニュースです。昨日、マルハツ町で爆破事件が起きました。幸い、被害者は出ませんでした。』

詐欺師「うわー本当に物騒ですね」

空き巣「マルハツ町ってここじゃん」

ウェイタ「爆破事件ですか…」

強盗「本当に犯罪者って、恐いなあ」

マスター以外、『うんうん』頷く。マスターにだけスポットライト。

マスター「私は彼らが恐いです。ここは犯罪者が集まるカフェ、カフェ・アラ・リーザ。ここにいる皆さんはこれから、もしかすると今日、各々の犯罪を行うことでしょうか。しかし、もし別々の犯罪者が1つの同じ現場で出会ってしまったら…一体どうなってしまうのでしょうか。本日は、その現場をその様子を、ご覧になれるかも

「しません」

マスター、後ろを向こうとするが止まり、再び正面に向き直る。

マスター「…え？どうして私が彼らを犯罪者だと知っているのかって？人の心が読める超能力者だから？ノンノン。スーパーハッカーだから？ノンノン。私はそんな大した人物ではありません。私はただ、少し演技の上手な、しがたいカフェのマスターですよ」

暗転。

【1幕】

『ガチャガチャ』音の後に扉が開く音。

明転。場所はヨネの家。

舞台中央に空き巣がいる。

空き巣「聞いてた通り、侵入しやすかったな。さあて、さつさと仕事してずらかるわよ。

こういう老人が暮らしてる家こそ金目のものがあるのよね」

空き巣、部屋中を物色し始め、タンスの前で止まる。

空き巣「ここが怪しい。私の空き巣リーダーが金目金目と反応している。(手をかける)

ほら、鍵がかかっている、金目。でも、私の手にかかれば…ピンを2つ使うだけで

…ほら！開いた！金目！」

空き巣、タンスから変な物を取り出す。

空き巣「なんだこれ！いらねーよ！」

空き巣、変な物を鍵のかかかっていない段の引き出しに入れる。そこから札束が出てくる。

空き巣「うわびつくりした！鍵のかかかってない方に札束かい。こんな無造作に入ってることある？まあ嬉しいけど。でもね、ばれないように盗るのは2枚だけ。これがプロの犯行ってもんよ」

空き巣、札束から2枚抜く。少しの間の後もう1枚抜いて、タンスに戻す。

空き巣「こんな札束があるなんて、良い物件だ。いやー誰だか知らないけど、情報くれた人に感謝だな！サンキュー！」

チャイム音。びくつとする空き巣。再びチャイム音。再びチャイム音。再びチャイム音。連続するチャイム音。

空き巣「子供か」

詐欺師『ごめんくださいーい！毎度ニコニコあなたの幸せを考えるスーパーハッピー販売の、小宮ですー！』

空き巢「うさんくさい奴来たな」

詐欺師『小宮ですー！本日も参りましたー！』

空き巢「ここの人と知り合いか…面倒だな」

詐欺師『小宮ー小宮ーあの小宮ですよー！ああ、あつちの小宮ではないですよ。…あの小宮ですー』

空き巢「小宮小宮うるせえな。あの、とか知らねえよ」

詐欺師『もしかしていらつしやらないんですかー？いらつしやらないんですたら…返事してくださいーい』

空き巢「そんな罠に引っかかるか」

詐欺師『あーそうですかー…今日は…仕方ないですねー。分かりましたー…』

チャイム音。

空き巢「なんで最後チャイム押したんだよ。…よし、再開しますか」

詐欺師、上手から勢いよく入ってくる。

詐欺師「小宮ですー！」

空き巢「うわあー！」

詐欺師「スーパーハッピー販売の、小宮ですー！」

空き巢「なんで入って来れてるの？」

詐欺師「玄関の鍵、開いてましたので」

空き巢「え？あ…まじか…閉め忘れたか（小さい声で）…」

詐欺師「思わず入ってきてしまった、小宮ですー！」

空き巢「小宮小宮うるせえな。何なんだよ」

詐欺師「小宮というのは、私です」

空き巢「それは分かるよ」

詐欺師「あの、私は小宮ですけど…あなたはどちら様ですか？」

空き巢「え？いや、私はですね…」

詐欺師「(キョロキョロしながら)あれ？今日もしかして…ウメさんいないんですか？」

空き巢「…そう！そうなんですよ！今日ウメ、いないんですよー」

詐欺師「そうなんですかー…」

空き巢「私、ウメの孫なんです。今日は遊びに来ました」

詐欺師「え？ウメさんの孫！？ええ！？」

空き巢 「いや、あの…嘘じゃないですよ」

詐欺師 「ウメってこの家で飼われている猫の名前ですよね？」

空き巢 「嘘でしたー！ウメの孫ではないです！私は人間です」

詐欺師 「そうですね？びっくりしたー！あ、もしかして、ヨネさんのお孫さんですか？」

空き巢 「そうです、ヨネです。ヨネでした。ヨネです」

詐欺師 「え！？ヨネさん！？（手を空き巢に向ける）」

空き巢 「いや私はヨネではないです。急に若返ったりはしません。ヨネの孫です。春子と言います」

詐欺師 「最初から分かっていますよ」

空き巢 「なんだお前」

詐欺師 「滑稽な方だなーって、見てました。それで今日はヨネさん、いらっしやらないのですか？」

空き巢 「そう…ですねー。ちよつと今、出かけてますね…」

詐欺師 「えー困ったなー」

空き巢 「なので今日は、一旦お帰りになられては？」

詐欺師 「いえね、今日はいつものことか外でお話させて頂いている商品をまとめて購入して頂くつてことになっていたんですよ」

空き巢 「そうなんですか。でもヨネいないんでね」

詐欺師 「それでは、待たせて頂いてもよろしいですか？」

空き巢 「え？いや、それは…」

詐欺師 「あー大丈夫です。邪魔にならないように隅っこの方で丸まっていますんで」

詐欺師、隅っこで丸くなる。

空き巢 「いや、そういうことじゃなくてですね」

空き巢、丸まる詐欺師をどかそうとするが全然動かない。

空き巢 「固！全然動かない！何これ！？…あんたね、いい加減にしないと警察呼ぶよ！」

間

空き巢 「呼ばないよ！感謝しろよ」

詐欺師 「どうも？」

空き巢 「とにかくここにずっと居られるのはちよつと」

詐欺師 「ではお孫さんのあなたが一旦私にお金を払って頂くというのはどうでしょう？」

空き巢 「はあ？」

詐欺師 「それでしたら私もすぐに帰れますので」

空き巢 「えー？」

詐欺師 「あとでヨネさんに支払ったお金を返してもらえば良いじゃないですか」

空き巢 「うーん…せっかくの良物件…(ダンスとかをじろじろ見る)あ、そんな高額と

かではないですよね…？」

詐欺師 「はい。それは勿論」

空き巢 「分かりました。ではぱっぱとやってぱっぱと帰ってくださいね」

詐欺師 「はい。一応、商品のご説明だけさせていただきます」

空き巢 「いいだろう」

詐欺師、アタッシュケースを開ける。

詐欺師 「まず私が今一番お勧めしたい商品、すごい幸せの水、『スーパーハッピーウォー

ター』です！」

空き巢 「ふうーうさんくせえー！」

詐欺師 「これを1日1本飲むだけで簡単に幸せになれます！これを飲んだお客様の声。有

名ミュージシャンのチケットが取れた！新幹線で、指定席が取れた！」

空き巢 「新幹線は誰でも取れるよ」

詐欺師 「そして…平穏な日々が戻って来た、というお声まで」

空き巢 「急にスケールでかくなっとな」

詐欺師 「そんなこのすごいお水お値段なんと18万円」

空き巢 「たっつか！18万！？頭おかしいんじゃないの！？」

詐欺師 「ですよー」

空き巢 「え、そこ共感しちゃうの？」

詐欺師 「(急に笑いだす)いや流石にこれが高いってことは分かりますよ。はははは」

空き巢 「情緒が怖いよ」

詐欺師 「まあ一般的にはお高いというお気持ちも理解できます。ので、今回、ヨネさん新規のお客様ということで、さらに80代、女性、人間、ということと諸々サービ
スしまして、1本18万円のところ1本なんと19800円！」

空き巢 「ええ！？18万が19800円！？たけーよまだ。あほか」

詐欺師 「それでは少し、幸せをお試してください。勿論これは無料ですので」

詐欺師、ボトルを開けて空き巢に勧める

空き巢 「えー…？(恐る恐る一口飲む)…甘い」

詐欺師「ね？」

空き巢「いや何が！？幸せになれるとかそんな話だったでしょうに！というかただ砂糖が入ってるだけでしょうが！」

詐欺師、軽く首をかしげる。

空き巢「お婆さんには通用したかも知れないけどね、私には通用しないよ！」

詐欺師「…次の商品はこちら！（針金のような物を取り出す）」

空き巢「勝手に進めるなよ」

詐欺師「ハッピーメタルスティック（おもむろに空き巢を刺す）」

空き巢「いてえな！」

詐欺師「これを持っているだけで簡単に幸せになります。これを持ったお客様の声。有名ミュージシャンのチケットが取れた！新幹線で指定席が、」

空き巢「さっき同じの聞いたよ」

詐欺師「後はなんかチーズとか刺してください」

空き巢「もうただの爪楊枝じゃんか」

詐欺師「お値段なんと18万円」

空き巢「出た18万円！」

詐欺師「しかし諸々サービスで19800円！」

空き巢「ええ！？18万が19800円！？…馬鹿野郎」

詐欺師「次の商品はこちら！ハッピーバルーン！（色とりどりの膨らんだ小さな風船が10個出てくる）このハッピーバルーン、なんと1つ割ることに…なっちゃんです」

空き巢「幸せに？」

詐欺師、空き巢の目の前で風船を1つ割る。

空き巢「うわあ！」

詐欺師「ビクッとなっちゃんです」

空き巢「そりやそうだろ！おちよくってんのか！」

詐欺師「このハッピーバルーン、全部合わせてお値段なんと、」

空き巢・詐欺師「18万円！」

空き巢「出ました！それで値引いて19800円！」

詐欺師「いやちよっとこれはお値引きできないですわね」

空き巢「どうしてだよ！これに何のこだわりがあんだよ」

詐欺師「とりあえず以上です」

空き巢 「いやいやそんな商品にね、お金支払えないですって」

詐欺師 「でもヨネさん、この商品すごい楽しみにしているんですよ？あなたには価値が分からなくてもヨネさんにとっては宝物なんです。まああなたが払えないのでしたら私は予定通り、ここでヨネさんを待たせてもらうだけですのよ」

空き巢 「あんたね…いい加減にしなさいよ」

詐欺師 「え？」

空き巢 「さつきから聞いてれば、ふざけたことべらべらぬかしやがって！」

詐欺師 「えっと…」

空き巢 「ヨネさんにとつては宝物だあ？それはあんたが、言葉巧みにヨネさんを騙したからでしょう！？」

詐欺師 「そんなことは…（顔を段々と下に向けていく）」

空き巢 「あんたのやつてることとはね…泥棒と一緒だよ！弱い婆さんからお金を盗む、コソ泥と同じなんだよ！この最低野郎が…まああの、コソ泥自体が最低つてことではないんだけど、とにかくお前は最低！これは確定！分かったらね、もう帰れ！二度とこの敷地に足を跨ぐんじゃないよ！」

空き巢、言い切つてスッキリした顔。詐欺師、下げていた顔をゆっくり上げる。

詐欺師 「…お前空き巢だろ？」

間

空き巢 「うん？」

詐欺師 「いやだからお前、空き巢なんだろ？」

空き巢 「うん？」

詐欺師 「うん？じゃねーよ。空き巢なんだろって」

空き巢 「空き巢…って何？」

詐欺師 「空き巢の意味は分かるだろうが。お前のことだよお前のこと」

空き巢 「いや…孫ですけど」

詐欺師 「思い出したんだよ。あの婆さんに女の孫はいねえ。孫は男しかいねえんだよ。この前あの婆さん言つてたわ、（婆さんの声真似）お前さんみたいな女の孫が欲しかったのう、つて」

空き巢 「（婆さんの声真似）ワシはそうは思わんのう」

詐欺師 「なんでだよ。それは誰目線なんだよ。（空き巢をじろじろ見る）なんかよく見たらまー空き巢みてえな、顔してるもん」

空き巢 「顔関係ないでしょ。せめて格好でしょ。でもそんなこと言ったらねえ、あんただ

って不法侵入でしょ」

詐欺師「別に私はヨネさんと顔見知りだし、聞かれたらなんか怪しい人がいたから捕まえ
ましたって言えば良いんだよ」

空き巢「ぐぬぬ……！」

詐欺師「さてさて、では警察でも呼びましようか」

空き巢「勘弁してくださいよー！私を捕まえたってあなたに意味なんてないですよー！」

詐欺師「ヨネさんの信用をより得られる」

空き巢「ごもつとも。じゃなくて、見逃してくださいよー！ほぼ同業者じゃないですか
ー！」

詐欺師「一緒にすんじゃねえよ！私はあくまで話術という自分の技術で、商品の価値を上
げているだけなんだよ！お前みたいなのは、弱いお年寄りからお金を盗むコン
泥とはなあ、ぜんっぜん違うんだよー！」

空き巢「さっきの私の言葉帰ってきたー…おかえり」

詐欺師「おかえりじゃねえよ。ふざけてんのか。もうお前が逃げても通報するぞ？」

空き巢「じゃ、じゃあさー！この家で見つけた私の戦利品、半分分けるからさ、見逃してよ！」

詐欺師「だから話聞いてなかったのか？私は空き巢とは違うんだよ。そんなただ盗んだだ
けのキタネー金な、私のプライドにかけて絶対に受け取れないね」

空き巢「じゃあどうすれば良いんすか？」

詐欺師「そうだな……じゃあお前が今言った商品全部買い取るってんなら見逃してやる
よ」

空き巢「え？」

詐欺師「まずはこれ、ハッピーメタルステイック！19800円！」

空き巢「はー！？」

詐欺師「何だよ？」

空き巢「くそー…分かったよ。足元見やがって…(ポケットからお金を出して渡す)ほら」

詐欺師「次はお待ちかね、スーパーハッピーウォーター、19800円」

空き巢「はー…何なんだよー(家のタンスからお金を出して渡す)ほら」

詐欺師「……えっと、ハッピーバルーン、合わせて18万円」

空き巢「おいおい…もう勘弁してくれよー(家のタンスからお金を出して渡す)ほら」

詐欺師「おかしくね？」

空き巢「え？」

詐欺師「いやさっきからおかしくね？」

空き巢「何が？」

詐欺師「いやさっきからそれ全部ヨネさんのお金じゃん！なにさも自分のものかのように
に色んな所からお金出してんの？私はお前自身のお金で買い取って言ってん
の！」

空き巢 「いやもう私のお金ですよ」

詐欺師 「あらヤダ強欲だこの娘。…だからさ、私はね、そんな金受け取りたくねえの。嫌なの。私が空き巢の元締めみたいじゃん」

空き巢 「とは言ってもですねボス」

詐欺師 「誰がボスじゃ。私はそういう泥棒行為はプライドが許さねえんだよ」

空き巢 「じゃあどうすんの？私今そんなにお金持つてないよ？あんた一旦帰るの？」

詐欺師 「帰るよ。後日また来て、大量のお金を騙し取るよ」

空き巢 「やつてること一緒じゃねえか！とうとう騙し取るって言ったね？もうさ、そんな意固地にならないでさ、効率的にいこうよ。あんただって二度手間だよ？」

詐欺師 「それはそうだけど…」

空き巢 「次来た時、ヨネさん騙されたのに気付いて、もういらない、もういらないって言うかもだよ？」

詐欺師 「うーん…」

空き巢 「あくまで盗むのは私。あなたが受け取るのは私のお金。これで良いじゃん」

詐欺師 「分かったよ…。でも、一旦このお金はあつたところに戻して、状況をリセットしてください」

空き巢 「めんどくさ」

詐欺師 「ほら早く」

空き巢 「分かったよ」

空き巢、お金をあつたところに戻す。

詐欺師 「そしてこれからここで起こることは全て私の認識外とします。私は盗難の様子を一切見ておりません。私は隅っこで丸まっているからね」

空き巢 「はいはい」

詐欺師、隅っこで丸まる。空き巢、再び所々を漁り始めるとタンスの隙間からカメラが出てくる。それを不思議そうに眺めているところで、上手からヨネが入ってくる。

空き巢 「うわ！」

ヨネ、疑問の表情で空き巢と詐欺師を見る。考える空き巢。

空き巢 「(小声でゆっくり) 私は…スーパー、ハッピー、販売の、小宮、です」

間

ヨネ 「ああ、小宮しゃん」

空き巣 「(小声でゆっくり) また、お伺い、致します。では」

空き巣、アタッシュケースを持って上手からはける。↓ハッピーウォーターだけ床に散らばっている。

詐欺師 「まだー？ねえまだー？お金盗ったー？ねえお金盗ったー？」

詐欺師、丸まるのをやめ、振り向く。

詐欺師 「ヨネしゃん…」

詐欺師、きよろきよろ部屋を見渡す。

ヨネ 「お主は誰じゃ…？」

詐欺師 「ヨネさん、私ですよ私。スーパーハッピー販売の、小宮です」

ヨネ 「小宮しゃんならしゃつき帰ったぞ」

詐欺師 「ええ？」

ヨネ 「空きしゆか？」

詐欺師 「いや多分その帰ったのが空きしゆです！」

ヨネ 「ええ？」

詐欺師 「私が本物の小宮です！(床に落ちている水を指差す) ほら、スーパーハッピーウォーター！」

ヨネ 「他の物は？」

詐欺師 「え？(アタッシュケースを探す) …あの野郎持っていきやがったな！」

ヨネ 「やはりお主が空きしゆか！？」

詐欺師 「違います！ヨネさん、良く見てみてください。(大げさに動きながら) 毎度ニコ

ニコあなたの幸せを考えるスーパーハッピー販売の、小宮、」

ヨネ 「お巡りしゃーん！変な人がおるー！」

詐欺師 「ちよつと！もー！あの野郎、覚えてろよ！」

詐欺師、逃げるように上手からはける。扉は開けっ放しにする。

間

ヨネ「ひっひっひっひ！なーんてな。こんなもの誰が買うか。あっちの空き巣も、まんとこの家に忍びこみおって。(カメラを手に持つ)さてさて、あの二人の誤魔化し合う映像を楽しむとするか。まだまだケツの青い犯罪者達をからかうのは楽しいのう！ひーっひっひっひ！」

ヨネ、水を飲む。

ヨネ「うーんスーパーハッピー！甘い！血压に響く！」

暗転。

【2幕】

場所は下手が入口、上手にトイレへの扉がある飲食店。店員が下手側の椅子で雑誌を読んでいる。食逃げ犯が上手側テーブルでご飯を食べている。

食逃げ犯にスポットライト。ご飯をひたすら旨そうに食べるマイム。明転。

食逃げ犯「さて…食い逃げするか」

マスター登場。↓基本的にマスターが出る時はスポットライトなりの照明効果
が欲しい。

マスター「(上手から出て) 彼女の名前は比良綾ヨネ。80歳。昔から空き巣や詐欺行為等
を行っておりましたが、現在はもっぱら食い逃げ一筋のベテラン犯罪者です。今
日はこの中華料理店をターゲットとしたようです (はける)」

食逃げ犯、キョロキョロする。

食逃げ犯「いける…!」

マスター「(上手から出て) ヨネは今が絶好の食い逃げチャンスと判断しました。店員は1
人、しかも今は雑誌に夢中。ちなみに読んでいるのは、エロ本です (はける)」

食逃げ犯、そろりそろりと下手入口に近づく。

マスター「(下手から出て) ヨネは慎重に入口へと進みます。…しかし、店員に近づいたヨ
ネに緊張が走るのです (はける)」

店員「くっくく…! はっはっは…!」

食逃げ犯「あやつ、笑っておる…エロ本で…!」

マスター「(真ん中から出て) エロ本で笑う。その不気味さと行動の読めなさにヨネは動く
ことができなくなってしまうのです (はける)」

食逃げ犯「あの男、良く見れば隙も無い…! 今日はやめておくか…? (ポケットに手を入れ
固まる)…な!」

マスター「(上手から出て) (ここでヨネ痛恨のミス。手持ちのお金は、20円だけだったの
です (はける))」

食逃げ犯、ニヤリと笑う。

マスター「(真ん中、顔のみ出す)しかし、ヨネは笑いました。食い逃げのコツはスリルを
楽しむこと。そしてどんなことが起こっても動じない心を持つこと。アクシデン
トとは決して思わないこと。ヨネはそれを信条にしているのです」

食逃げ犯「ワシが逃げ腰になるとはな…!」

マスター「ヨネは武者震いをしました」

食逃げ犯、もじもじする。

マスター「いや違う普通に尿意でした。しかしこの尿意もアクシデントではありません。ま
ずは華麗にトイレを楽しむとしよう。それこそが、ヨネの余裕なのです(はける)」

食逃げ犯「(店員に) トイレを借りても良いかのう?」

店員「ちょっと店長いないんで分らないです」

マスター「(上手から出て) 融通の利かないゆとりか!とヨネは心で叫びました。しかしこ
れも、ヨネにとってはアクシデントではありません。では勝手に使おう、トイレ
1つにスリルを与えるとはあの小僧…。久しぶりに心躍るヨネであったのです
(はける)」

食逃げ犯、上手からそろりそろりとはける。

間

下手から大きな鞆を持ち、マスクを付けた強盗が入ってくる。

店員「いらっしやいませ」

店内をキョロキョロした後、ゆっくりとレジにいる店員に近づき、一度はける。
上手から食逃げ犯が出てくる。

強盗すぐに戻ってきて、ポケットから何かを取り出し店員に突きつける。

強盗「金を出せ!強盗だ!」

食逃げ犯「むむ!」

マスター「(真ん中から出て) しかしヨネ、これもアクセシントとは思いません」
食逃げ犯「いやこれはもうアクセシントって思うわ」

マスター「え!？」

食逃げ犯「実を言うと正直さっきのも大体アクセシントじゃと思っと思ったし」

マスター「ええ!？何なんですか!」

食逃げ犯「いやそういうお前こそさっきから何なんじゃよ!勝手に出てきて!」

マスター「私は心の中のマスターです。本人とは関係ありません」

食逃げ犯「もう出てこなくていいよ。話の軸がブレるから」

マスター、はける。

食逃げ犯、上手袖に隠れて顔だけ出す。以後、様子を見ながらここで喋る。

強盗「さつさと金を出せ!」

店員「いやでも、」

強盗「でもじゃねえ!早く金を…(鞆を開く) この鞆に詰める!」

店員「でも、それ持つてるの、スニッカーズですよ?」

強盗「スニッカーズだ!」

食逃げ犯「スニッカーズかい!」

強盗「なんで?」

食逃げ犯「いや店員に聞くなよ!」

店員「好きだからじゃないですか?」

食逃げ犯「答えるんかい!」

強盗「好きではあるけど」

食逃げ犯「なんだあの会話」

強盗「違う違う!なんだこの会話!くそ…:カッターちゃんとポケットに入れてたはずなのに…!」

店員「武器が無いんですたら…:お金はちよつと」

食逃げ犯「そうじゃそうじゃ。出直してこい」

店員、レジに乗った強盗の開いた鞆の中を見る。

店員「あ」

強盗「なんだよ?」

店員「いえ別に。奥にカッターが見えたとかじゃないですよ」

食逃げ犯「いやそれじゃバレバレじゃろ!」

強盗「そうか」

食逃げ犯 「あいつも信じるんかい！」

強盗 「でも一応…（鞆を探しカッターを取り出す）あつた！（店員をジロツと見て）…
お前が鞆の中身を気にしてくれたおかげだな！ありがとう！」

間

強盗 「さあ金を出せ！」

店員、手をあげる。

食逃げ犯 「なんだあのやり取り！あの強盗の感情が分からん！」

店員、レジからお金を出し、お金をじっと見つめる。

強盗 「早く詰める！」

店員 「えい」

店員、レジのお金を床（後方）にばら撒く。

強盗 「おい！何してくれてんだ！」

強盗、床のお金を拾う。店員、この隙にお店の電話にゆっくり近づこうとする。

食逃げ犯 「良いぞあの店員！ナイスかく乱！この隙にサツに連絡じゃ！サツに…：警察？」

マスター登場。

マスター 「（真ん中から出て）そう。この時、ヨネにある結末が浮かんでしまったのです」

食逃げ犯の妄想。

照明効果。警官、下手から入ってくる。強盗、店員に足蹴にされている。

警官 「いやー恐かったでしょお婆さん？大丈夫でしたか？」

食逃げ犯 「大丈夫じゃ」

店員 「それじゃあお婆さん、お会計お願いします」

食逃げ犯 「…」

警官「どうしましたー？」

食逃げ犯、ゆっくり20円を出す。

店員「いやいやいや20円って。うちの料理はチロルチョコと同じ価値しかないと言いたいんですかー？」

警官「まさか…食い逃げしようとしてたのかお前！？」

店員「そういえばこつちをじっと見たり、怪しかったなあんだ」

警官「こいつも犯罪者だー！」

強盗「やっちまえー！」

食逃げ犯、警官・店員・強盗・の3人に足蹴にされる。マスター、前方で踊る。

食逃げ犯「や、やめてくれー！」

妄想終了。警官、はける。店員、強盗、元の位置に戻る。マスター、はける。

食逃げ犯「駄目じゃー！サツを呼ばれるのは駄目じゃー！あの電話をやめさせんと！」

店員、電話にたどり着く。

食逃げ犯「強盗の男、店員の動きに気付けど…！気付けど…！」

強盗、何かを感じ立ち上がる。食逃げ犯、『気付けど』と言いながらゆっくり下手へ移動してしまう。強盗、食逃げ犯の方を向く。

強盗「うわあ！婆さん何時からそこに！？」

食逃げ犯「ワシに気付くんかい！」

店員「もしもし…」

食逃げ犯「(店員を指差し) あっちあっち」

強盗、店員が電話しようとしているのに気づく。

強盗「おい！」

強盗、店員の持つ電話を奪い取る。

強盗 「てめえ今どこに電話しようとした？」

店員 「そんなの勿論：店長ですよ」

食逃げ犯 「店長かい！」

店員 「何かトラブルが発生した場合は店長に連絡することになっているので」

食逃げ犯 「マニュアル人間か！こういう時は普通警察じゃろ！」

店員、ああ！と気付いた顔。マスター登場。

マスター 「(真ん中から出て) ああそっか！彼はそう思いました(はける)」

食逃げ犯 「今気づいたんかい！」

強盗 「店長にだったのか：でも俺は謝らねえぜ」

食逃げ犯 「優しいなお前」

強盗 「そういえば婆さん：巻き込んで悪かったな」

食逃げ犯 「優しいなお前」

強盗 「じゃあ婆さん、あんたはこれが終わるまでそこでじっとしてな」

強盗、床のお金を鞆に詰める。

強盗 「おい、この中まだまだ入るだろ。もっと金持ってこい」

店員、ポケットから100円を取り出し、鞆に入れる。

強盗 「ありがとう。違うよ！お店のお札！もつとあるだろ！？」

店員 「これで全部ですよ」

強盗 「そんな訳ねえだろ！こんな鞆余ってんだぞ！」

食逃げ犯 「鞆の大きさはそっち次第じゃろ」

強盗 「いやいやいや！だってテレビとかだともっとパンパンに入ってるだろうが？婆

さん、何も知らないゆとりかあ？」

食逃げ犯 「いやここただの飲食店じゃから。銀行じゃないんじやから」

強盗、ああ！と気付いた顔。マスター登場。

マスター 「(真ん中から出て) ああそっか！彼はそう思いました(はける)」

食逃げ犯 「今気づいたんかい！ちよつとキミ達今気づくこと多くない？」

強盗 「ちよつと待つてくれよ：一大決心して、強盗までして、こんな金だけで帰らない

といけないのか？」

食逃げ犯 「まあ：そうじゃな」

店員 「そもそもこのお金も持って行かないでほしいなあ」

強盗 「なんでいつも俺はこうなんだ？」

食逃げ犯 「いや知らんよ」

強盗 「なんでいつも俺はこうなんだ？」

食逃げ犯 「え？」

強盗 「：なんでいつもいっつもいっつも俺はこうなんだああああ！！やる犯罪やる犯罪うまくいかなんだあああ！！！」

食逃げ犯 「自暴自棄になっちゃったよ」

店員 「へたに優しさを持った若者ほど、キレたら恐いですからね」

強盗、店員を人質にとる。

店員 「うわ」

強盗 「おい婆さん！こいつの命が惜しかったら金を出せ！」

食逃げ犯 「急になんじゃあいつ！言ってること滅茶苦茶になつとるよ！？」

強盗 「なつてない！とにかく俺は成功させるんだ強盗！そのためにはもつと必要なんだお金！さあ金を出せ！」

食逃げ犯 「いやワシ今20円しかないよ」

強盗 「ふざけんな！いつも年金持ち歩いてろ！じゃあもうだったらここから出て金を調達してこい！」

食逃げ犯 「良いのか！？チャンス到来！」

強盗 「いや待て！逃げるのは許さねえ！もし逃げたりしたらわかっているだろうな？こいつ（店員）のことを、あの、あれだぞ：血とか出ちやうかもよ？」

食逃げ犯 「なんじゃその中途半端な脅し」

強盗 「とにかくどこでも良い！何でも良い！金を持って戻って来い！さっさとしろ！」

食逃げ犯 「分かった分かった」

店員 「ちよつと待ってください」

食逃げ犯 「どうした？」

強盗 「勝手に喋るな！」

店員 「あなた今、20円しかないんですよ？」

食逃げ犯 「うむ：すまん」

店員 「ということは：食い逃げしようとしてました？」

間

食逃げ犯 「え、このタイミングで言う！？」

店員 「食い逃げしようとしている人を外に出す訳にはいきません」

食逃げ犯 「いやいやいや！今そんなこと言ってる場合じゃないだろう？」

店員 「いえ店長から食逃げ犯は絶対外に出しちゃ駄目だと言われているんで」

食逃げ犯 「店長の指示を守るねキミは！というかそもそも食い逃げしようとしてないしー」

店員 「じゃあなんですか？20円で食べようとしてたんですか？うちの料理はチロルチョコと同じ価値しかないと言いたいんですかー？」

食逃げ犯 「同じこと言った…」

店員 「とにかくあなたは外に出たら駄目です。そして現状、外に出ることが出来る人間はこの中にいません。つまり強盗さん、あなたの負けということですよ」

間

強盗 「畜生…！」

強盗、店員を解放する。

食逃げ犯 「納得するんかい」

強盗 「くそ…！こうなったらもう、今度こそ銀行へ強盗に行くしかねえ…！何としても金を稼がないと…！」

食逃げ犯 「待て。お主はどうしてそんなに金を欲しがる？はっきり言って、お主のような男に強盗、というか犯罪は合っていないと思うぞ？」

強盗 「俺は…妻のために犯罪をやらないといけないんだ」

食逃げ犯 「どういうことじゃ？」

強盗 「俺の妻も、俺と同じ…犯罪者なんだ。犯罪で金を稼いでいるんだ。はっきり言って俺より全然稼いでる。でも俺はあいつに、犯罪をやめさせたい」

食逃げ犯 「ふむふむ」

強盗 「だから…あいつが犯罪で稼がなくても大丈夫なように、俺自身ももっともって金を稼ぐ必要があるんだ！犯罪で！」

食逃げ犯 「なるほどのう…だからお主が奥さんのために強盗を…」

強盗 「俺はあいつのために…犯罪で成功するしかないんだ…！」

食逃げ犯 「そんな事情が…」

店員 「だったら普通にお金を稼げば良いのでは？別に犯罪しなくても」

間

食逃げ犯と強盗、ああ！と気付いた顔。マスター登場。

マスター「(上手から出て) ああそっか！彼らはそう思いました(はける)」

店員「今気づいたんですね」

食逃げ犯「確かにそうじゃ…！なぜか犯罪することを前提に考えておった！」

強盗「それじゃあもしかして俺は…これ以上犯罪をしなくても…良いのか？」

店員「はい、もうあなたは犯罪をしなくても大丈夫です。だから早くそのお金を返してください」

強盗「でも…心配だ。急に犯罪をやめて、俺は変われるのだろうか？」

食逃げ犯「大丈夫じゃ、人間は変わる。実を言えば…ワシも昔は悪いことをたくさんやった。空き巣、詐欺、と色々やった。犯罪者と言われれば…そうだったんじゃない？」

店員「それ今ですよ。食い逃げしようとしてましたから」

食逃げ犯「空き巣…詐欺と、ワシはいい加減嫌気が差しておった。しかしそんな時、出会ったのじゃ…ワシにピッタリな、運命のものに」

店員「あ、それが食い逃げですね」

食逃げ犯「もう一度言う…人間は、変わる」

店員「やってる犯罪の内容が変わったってことですね」

食逃げ犯「お主は自分の良いところが、分かるか？」

強盗「…顔ですか？」

食逃げ犯「うん、そう、優しさじゃ」

店員「スルーしましたね」

強盗「優しさ…？」

食逃げ犯「お主は優しい心を持っておる。ただ、それをうまく出せない不器用な人間なだけじゃ。しかし！これからはそれを存分に発揮するのじゃ！そして！お主は優しく真つ当な人間になるのじゃ！」

強盗「こんな俺でも、真つ当な人間になれるのでしょうか？」

食逃げ犯「なれるなれないじゃない…！もうお主になら、分かるじゃろう？」

間

食逃げ犯「分かる分からないじゃない！もうお主になら…分かるはずじゃ！」

間

強盗「はい！」

食逃げ犯 「よし！ワシの教えはここまでじゃ！これからはお主自身で道を見つけるのじや！」

強盗 「はい！」

食逃げ犯 「よし！ゆけ！」

強盗 「う、うおおおお！！！」

強盗、上手へ走り去って行く。

間

マスター登場。

マスター 「(真ん中から出て) ヨネは…最後の方、自分でも」

食逃げ犯 「言ってることよく分からなくなってた」

店員 「ですよね。なんか着地点見失ってましたもんね」

食逃げ犯 「あやつが単純でよかった…」

マスター 「しかしヨネは、すがすがしい気持ちでした。ずっと犯罪者でしかなかった自分がこんな気持ちになれる。間違った道を歩む若者を真つ当な道に戻してあげることで。ヨネは今日の出来事で、何か見つけたのかもしれない。そう、それは私と…いや、この話はまた今度にしましょう(はける)」

食逃げ犯 「さて、と。ワシもそろそろ帰るとするかろう」

食逃げ犯、下手からはけようとする。

店員 「待ってください。お金のことがまだ」

食逃げ犯 「……」

店員 「私が店長に怒られてしまうので」

食逃げ犯 「クッククック…まだまだ青いのお主…！」

店員 「え？」

食逃げ犯 「本当にワシが20円しか持っていないと？」

店員 「はい」

間

食逃げ犯と店員、ダッシュするポーズ。

暗転。

明転。場所はカフェ・アラ・リーザ。

上手側カウンター席でマスターがうたた寝している。下手側テーブル席に空き巣と強盗が座っている。空き巣の横には1幕で詐欺師から奪ったアタッシュケース、強盗の横には2幕の大きな鞆が置かれている。

強盗「よし…！」

空き巣「何？今日この後何かやるの？」

強盗「うん！今日の俺は一味違うよ」

空き巣「そのマスクと鞆…やろうとしてるのってまさか…？」

強盗「ああ」

空き巣「えーちよつと大丈夫？そんな大きなことしてもどうせあんたマヌケなんだから失敗するよ？」

強盗「しないよ！これで大金稼いでくるよ！」

空き巣「なんか分からないけどさ、変な婆さんとかに邪魔されるんじゃないの？分かんないけど。私もこの前婆さんに邪魔されて、ガラクタしか入ってないケース持って帰るはめになったし」

強盗「お婆さんというのは人を邪魔する存在じゃないよ。むしろ助けてくれるよ。これからの道を俺に教えてくれそうだよ。そして俺はその後叫んで走り出すよ！」

空き巣「どうということなの？」

強盗「うおおって」

空き巣「予知なの？それは」

強盗「ごめんなんか自分でもよく分からなくなってた…。ちよつとトイレ行ってくる」

強盗、下手（トイレ）へはける。空き巣、スマホをいじり始める。上手（入口）から警官が入ってくる。

警官「こんにちは、はー…」

警官、カフェの様子を見ている。そして何か決心した顔になる。警官にスポットライト。

警官「よし。スリをしよう」

マスター「（寝ぼけながら）この男、表の顔は警察官ですが裏の顔はスリ師だったのです…むにやむにや…」

マスター再び眠りにつく。

※ここから基本的に演者はサイレントで、リアクションはオーバーに。状況に合わせて色々BGMを流して遊ぶ。

明転。

警官、うたた寝しているマスターのポケットを慎重に探る。財布が出てくる。喜ぶ警官。その財布を自分のポケットにしまう。

次に下手側のテーブル席に近づく。スマホをいじる空き巣に気付かれないように、強盗の鞆を探るが何も出てこない。

下手から強盗が戻って来る。警官、強盗とすれ違いざまポケットから財布とカッターナイフを盗る。喜ぶ警官。

強盗、席に座る。強盗、トイレに人が入っていて入れなかったことを空き巣に伝えてる。

マスター、起きて、ポケットを調べると財布が無いことに気付く。その様子を見てニヤニヤする警官。

しかしマスター、別のところから財布を取り出し、ホッとする。警官、持っているマスターの財布の中身を見てみると何も入っていない。悔しがる警官。マスター、再びうたた寝を始める。

警官、再びマスターに近づき、財布を盗る。喜ぶ警官。

下手(キッチン)からウェイターが出てくる。ボーナスステージのBGM。お尻ポケットに財布を差したウェイターがクルクル回りながらテーブルを拭いたり、お冷を注いでいる。警官、ウェイターの動きに合わせて見事ウェイターから財布を盗る。喜ぶ警官。そのまま下手(キッチン)へ帰っていくウェイター。

強盗、ポケットに財布が無いことに気付く。空き巣にそのことを尋ねる。私を疑っているの？と2人の雰囲気が悪くなり、喧嘩が始まる。※最終的に、空き巣が強盗に往復ビンタをし続ける。

警官、そんな2人に近づき、今度は空き巣の鞆から財布を盗る。そして警官、カッターナイフを強盗の鞆に入れる。

マスター、再び起きて、ポケットを調べると財布が無いことに気付く。その様子を見てニヤニヤする警官。

しかしマスター、再び別のところから財布を取り出し、ホッとする。警官、再び持っているマスターの財布の中身を見てみると20円しか入っていない。悔しがる警官。マスター、再びうたた寝を始める。

警官、再びマスターに近づき、財布を盗る。喜ぶ警官。

再び下手（キッチン）からウェイターが出てくる。ボーナスステージのBGM。お尻ポケットにスニッカーズを差したウェイターがクルクル回りながらテーブルを拭いたり、お冷を注いでいる。警官、ウェイターの動きに合わせて見事ウェイターからスニッカーズを盗る。喜ぶ警官。そのまま下手（キッチン）へ帰っていくウェイター。

マスター、再び起きて、ポケットを調べると財布が無いことに気付く。その様子を近くでじっと見ている警官。

マスター、再び別のところから財布を取り出す。それを盗る警官。しかし再び別のところから財布を取り出すマスター。それを盗る警官。を繰り返す。最終的にどこを探しても財布が出てこなくなるマスター、がつくりうなだれる。めっちゃ喜ぶ警官。

マスター、横にいる警官を見る。目が合う二人。ゆつくりと敬礼する警官。ゆつくりと敬礼を返すマスター。マスター、財布知らない？と警官に尋ねる。ゆつくりと空き巣と強盗の方を指差す警官。ゆつくりとそちらを向くマスター。マスター、空き巣と強盗の喧嘩に入っていく。喜ぶ警官。

警官、3人が争っている隙に強盗のポケットにスニッカーズを入れる。その後、空き巣のアタッシュケースの中身を物色し始める。1幕で出てきた変な商品が次々と出てくる。警官、それに対してリアクションしていく。

再び下手（キッチン）からウェイターが出てくる。緊張感のあるBGM。ウェイ

ター、カクカク動きながら財布を探している。警官、ウェイターにばれないようにアタッシユケースの中身を物色する。そしてそのまま下手（キツチン）へ帰っていくウェイター。

『ジャー』という音と共に（別の）アタッシユケースを持った男が下手（トイレ）から出てくる。男、アタッシユケースを物色している警官をじっと見ている。

男、警官の不審な様子を警官にばれないように争っている3人に伝える。マスター、空き巣、強盗、男の4人、まだアタッシユケースを物色している警官の後ろをぐるつと囲む。

ようやく囲まれていることに気付く警官。警官、アタッシユケースを閉じ、ゆっくりと立ち上がる。

警官「最近、不審物が多いのでチェックしていたところです。今回は大丈夫でした。（アタッシユケースをカウンターに置く）皆さんも何か怪しい物を見つけませんでしたか？」

4人、警官のポケットを指差す。

警官「ああこれね！無防備に置かれていましたので私がお預かりしておりました！さあさ、お返しします！」

警官、財布をそれぞれの持ち主に返す。

警官「おやおや？まだ怪しいものがありますね。（男の持っている）そのアタッシユケースも、見せてもらって良いですか？」

警官の頭を叩くマスター。

男「なんですかあなた」

男、上手からはけようとする。

マスター「ああすみませんお客様、代金の方を」

男「ああ、そうでした」

男、アタツシユケースを空き巢のアタツシユケースの横に置いて、マスターに代金を支払いに行く。空き巢と強盗、無言の圧力で警官を下手端まで追い詰める。男に電話がかかる。

男「失礼。(電話に出る) どうしました？はい…いや、ですからドカンと燃え上がるように炒めるのが中華のコツとあれほど…」

男、電話で話しながら空き巢のアタツシユケースを間違えて持ち、上手からはける。

警官「あつと！もうこんな時間だ！それじゃあ皆さんも、犯罪なんかには気を付けてください。特に…スリなんかにはね」

警官、上手から逃げるようにはける。

間

強盗「あいつ…警察だよね？(空き巢に)」

間

空き巢「あの人警察よね？(マスターに)」
マスター「根は、悪い人ではないのですが」

暗転。

【4幕】

電車の中。『ガタンゴトン』音。

被害者『ちよ、ちよっと。いい加減にしてください……!』

証人『何やってんだお前!』

『ガタンゴトン』音。

明転。

場所は駅員室。舞台にはテーブル1つ、椅子が2つ。1つに俯いた被害者が座っている。痴漢と証人、立っている。

間

痴漢「あなた（被害者）もこんなトラブルに巻き込まれてツライでしょう。ですが、いつまでもそんな風に落ち込んだ顔をしていても、駄目だと思います。あんまりこういうこと言うのは得意じゃありませんが：あなたは多分、笑っている顔の方が素敵だと思うんです」

被害者、顔を上げる。

痴漢「あ！もうこんな時間だ。私はこれから仕事なんです。あなたの笑顔が見られないままなのは残念ですけど、私はもう行きます。では」

痴漢、上手からはけようとする。証人、痴漢の腕を掴む。

証人「では、じゃないよ。彼女がこんな風になっているのは、キミが痴漢したせいだからね！」

痴漢「え？」

証人「え？じゃないよ！びっくりしたー！こっちがえ？だよ。さっきの何？彼女に言うてたの」

痴漢「いや私そのまま彼女を見て感じたことです」

証人「芸術家か！彼女が笑顔じゃないのは、キミが痴漢したからだよ？」

痴漢「ふふ。そもそも私は痴漢なんてしてないですから。では」

証人「だからでは、じゃないよ！帰れる訳ないだろう！」

痴漢 「でも、仕事があるんですよ」

証人 「知らないよ！」

痴漢 「参ったなあ：遅刻するとすっごい怒るんですよ、店長」

証人 「だから知らないよ！キミが痴漢したせいだろう！」

痴漢 「だからしてないですよ。ねえ？（被害者に）」

被害者、痴漢に嫌悪感を示し、再び俯く。

痴漢 「ほらあ、されてないって」

被害者、驚いて顔を上げる。

証人 「どうしたらそういう解釈になるんだ！今の彼女のリアクションはどう見たって、

キミが気持ち悪くて顔を背けた、だろう！ねえ？（被害者に）」

被害者、強く頷く。

痴漢 「なんか私達、話がうまく噛み合いませんね」

証人 「全部キミのせいだよ！というか、僕だってキミが痴漢していたところをばっちり

この目で見ているんだ！言い逃れはできないよ！」

警官、上手から現れる。

警官 「はいはい、どうも警察です。えーつと、痴漢した人がいると聞いたんだけど…あ

なた（証人）かな？」

証人 「違います！この男（痴漢）が彼女に痴漢行為をしたんです！」

痴漢 「してないですって」

証人 「黙れ！この犯罪者が！」

警官 「はいはいはい、落ち着いて。とりあえず詳しい状況説明、お願いできる？」

証人 「はい！今から1時間前、彼女と僕は総武線の同じ車両に乗っていました。彼女は

ドアの横、僕はその反対側のドアの横に立っていました」

警官 「うんうん。キミと彼女は同じ駅から？」

証人 「はい！同じ町に暮らしていますので。そしてその30分後、この男が僕達のいる

車両に入ってきたのです！」

警官 「うんうん」

証人 「そしてこの男は彼女の後ろにスッと回り込んだんです！分かりますか？これじ

「やあ僕が彼女のことを見る事ができない！」

警官「うん？」

証人「そう思った僕は、もっと彼女が良く見える場所に移動しました。(段々大きさにするとなんということだ！あの男が彼女のお尻を触っているではないか！今日はおそらく白のレースの下着を付けている彼女のヒップをそれはもうまさぐるように触っていたのだあ……！」

警官「え？ミュージカル？」

証人「すみません、あの男への怒りで興奮してしまいました……！」

警官「うんうんうん。ちよつと確認いいかな？」

証人「はい」

警官「えつと、彼は彼氏さん？(被害者に)」

証人「ちよ、ちよつと！急に何を言っているんですか！彼女も困っているでしょう！」

被害者「いえ、違います」

証人「はい、まだ、違います」

警官「ああそつかそつか。それじゃあ彼は、ご友人かな？」

被害者「いえ、初対面です」

証人「ちよつとちよつと！初対面って！冗談キツイなあ！僕の仕事場で5回も会っているじゃないですか！そこで8回も目が合ったことだってある！それに、東公園で4回、三角スパーで3回もすれ違ってるし！ねえ？」

警官「それじゃあ彼はストーカーかな？」

証人(以下ストーカー)「ちよつと！ストーカーって！お巡りさんまで冗談キツイなあ！僕はただ、彼女をあいづみみたいな犯罪者から身を守ってあげているだけですよ！陰からずーっと観察して」

警官「ストーカーだこいつー！」

ストーカー「違いますって！(ジップロックを取り出す)このヘアピンだって彼女が僕の仕事場で落としたからたまたま大事にジップロックに入れて持っているのであって、このヘアピンの匂いを嗅ぐのも1日12回にしています！」

警官「ストーカーだー！紛れもねえ！どんだん墓穴を掘っていくスタイルだね？見てほら、彼女の顔！味方だと思ってた人が急に敵になると人間こんな顔になるんだねー」

痴漢「あなたストーカーなんですか？ヒクわー」

ストーカー「キミにだけは言われたくないね！この痴漢が！」

警官「えーでもどうしよう。急に犯罪者増えたな」

ストーカー「とりあえずこいつの方を何とかしましょうよ！痴漢はしているんですから！」

痴漢「してないです」

警官「うーん……こうなってくると彼もホントに痴漢していたのか怪しくなってくるな」

被害者 「私も分からなくなってきました…もつと気持ちの悪い人が正体を現したので…」
ストーリーカ 「いやいや待ってくださいよ！だったらこの男の荷物とか調べてみてください！」

警官 「良い？」

痴漢 「勿論。どうぞ」

警官 「じゃあ一応鞆の中身、調べさせてもらうね」

警官、痴漢の鞆から物を出していく。※文庫本にはカバーがしてある。エロ本は全部お尻関係の本。

警官 「えつと…本がたくさんあるね。文庫本、うん。文庫本、うん。…エロ本？文庫本。

エロ本「お尻倶楽部。凶鑑」人体の不思議シリーズお尻編。エロ本「人妻とお尻合い。哲学書お尻とは。お尻のキーホルダー。エロ本「E:ヒップモンスター。キミ痴漢してる？」

痴漢 「してないです」

ストーリーカ 「してるだろ！お尻関係のエロ本ばかり集めやがって！といふかなんで文庫本にはカバーかけて、エロ本にはかけないんだよ！逆だろ！」

警官、文庫本の中身を見る。

警官 「見たらこつちもエロ本だった！（表紙見せる）」

ストーリーカ 「結局全部エロ本かい！」

警官 「痴漢してそうだなこいつ。今疑惑がすごいよ」

痴漢 「してないです」

警官 「じゃあちよつとこの人（ストーリーカー）のお尻、触ってみて」

ストーリーカ 「ええ！？」

警官 「捜査にご協力願います」

ストーリーカ 「…分かりましたよ」

痴漢 「良いんですか！？」

ストーリーカ 「急にテンションヤバいなお前！」

警官 「やってんなこいつ」

痴漢、ストーリーカーのお尻をもの凄いやらしいヤらしく触る。

警官 「してんなこいつ。手つきがすごいヤらしいもん。やってんな痴漢」

痴漢、ずっとストーカーのお尻を触っている。

ストーカ 「いつまで触ってんだ！（痴漢を引き離す）」

痴漢 「ああん：68点」

ストーカ 「なんの点数だ！そしてその手腕！絶対痴漢してんだろ！」

痴漢 「してないですよ。私はただ、お尻が好きなのです。男女問わず、ね」

ストーカ 「なんでちよつとカッコ良く言ってるんだよ」

痴漢 「一目見てその人のヒップサイズが分かるくらい、お尻が好きなのです」

警官 「してそうだなー痴漢。キミも墓穴掘っていくスタイルだねー」

ストーカ 「じゃあそんなに言うなら：彼女のヒップサイズを僕に教えてごらん」

警官 「それキミが知りたいだけじゃないの？」

痴漢、ストーカーに耳うちする。

ストーカ 「うん、うん、うん：正解！」

警官 「もう知ってた！すでに彼女のサイズ知ってたこいつ！」

ストーカ 「ただし彼女は今、バナナダイエットを行っていてね。あと3カ月もしたらその数値はマイナス2とみて良いだろう。少し残念だ。まあ僕は、彼女がダイエットなんてしなくても、そのままのキミで十分魅力的だと思うけどね！」

被害者、嘔吐く。

警官 「嘔吐いちゃったよ彼女…」

ストーカ 「おいおい。無理なダイエットは体に毒だよ？」

警官 「どっちもやべなこいつら」

痴漢 「あ、じゃあお巡りさんのお尻も触って良いですか？」

警官 「駄目だよ。何がじゃあ何だよ」

痴漢 「あわよくばと」

警官 「欲望が丸出しになってきたね。絶対痴漢したでしょう？」

痴漢 「してないです」

ストーカ 「いや！絶対してました！絶対でございます！こっちはお前が痴漢していると
ころを最初から最後までズーっと見てましたから！」

警官 「だったらもつと早く止めてあげてよ。なんでずつと見るだけなんだよ」

ストーカ 「お前分かってんのか？お前分かってんのか？お前もうホントあれだよ。もうお前
ほんつとにあれだぜ、もうホントに、もうホント……羨ましい」

痴漢 「え？」

ストーカ 「分かっているのかキミは！？彼女の高尚な…あー言葉にできない！場所に触れたんだぞ！」

警官 「逆にそれ卑猥になってるぞ」

ストーカ 「誇りに思え！」

痴漢 「はあ…まあしてないですけど」

ストーカ 「もうそういうのは良いからさ…どうだったんだよ？」

痴漢 「何が？」

ストーカ 「何が？じゃないよ！分かっただろう？彼女のお尻…どうだったんだよ？」

被害者 「ちよつと何言ってるんですかあの人？」

警官 「キミちよつとそれは、」

ストーカ 「自分でも今、正気じゃないのは分かっています…！」

警官 「ずつと正気じゃないと思ってたけど…」

ストーカ 「でも…知りたいんだ！どうしても！その触れた感覚を…！僕はずつと見てた…！ずつと見てたんだよ…！でも僕には…彼女に触れることは…できなかつた…！僕はこのヘアピンに残った匂いを嗅いで彼女を想像することしかできなかつた…！でもキミは違つた！キミは…勇敢な冒険者だ！皆に希望と勇気を与えてくれる冒険者だ！冒険者様…どうか憐れなこの僕に…感触という名の希望を…教えてくれませんか？」

被害者 「ホント何言ってるのあの人？ヤバイヤバイ。お巡りさん、早くあいつなんとかしてください」

警官 「もうさ…教えてやれよ（痴漢に）」

被害者 「お巡りさん？」

警官 「ああいやちよつともう面倒になつてきたので」

ストーカ 「頼む…！」

痴漢 「私は、痴漢をしていません」

ストーカー、うなだれる。

痴漢 「…ですが、あの人のお尻の感触は分かります」

ストーカ 「痴漢さん…！」

被害者 「あいつも何言ってるんだよ。矛盾してるだろ言ってることが。痴漢したから分かるんだろうが」

ストーカ 「ありがとう…！」

被害者 「何これ？」

警官 「早く聞かせてやれ」

被害者 「お巡りさん？」

警官 「もうさっさと終わらせましょう」

痴漢、ストーカーを手招きする。ストーカー、痴漢に近づく。さらに痴漢、警官も手招きする。

警官 「え？私もかい？…参ったな」

警官、痴漢に近づく。

被害者 「行くんかい」

痴漢、警官のお尻を触る。

警官 「うわあ！畏か！」

痴漢 「コンプリート」

詐欺師 「おい今コンプリートって言ったな？あいつなあ？」

ストーカー 「それでは、教えてください」

痴漢とストーカー、顔を近づけ合ってひそひそ話をする。被害者、警官に訴えかける。

警官 「まあまあまあ、あれで終わるんですから」

ストーカー 「うんうんうん…へー！」

警官 「何に感心したんだ？」

ストーカー 「え！？マジで！？」

痴漢とストーカー、被害者のお尻を見る。

ストーカー 「そんなものと（手をグググッさせる）一緒なんだー」

警官 「何と比べられたんだ？」

被害者、痴漢とストーカーの頬を空のペットボトルで思いっきり叩く。

被害者 「いい加減にしろ！」

被害者、警官の頭も叩く。

警官 「なんで？」

被害者 「いい加減にしろよお前ら！さつきから黙って聞いてりゃあぶざけ倒しやがってよ！セクハラだぞさつきから！？ていうかいつまで近くで固まってんだよ！もう離れろお前ら！」

痴漢とストーカー、渋々離れる。

被害者 「おい、まずはお前だよ！（痴漢）痴漢してんじゃねーよ！そもそもはお前なんだよ！」

痴漢 「痴漢してないです」

被害者 「もう良いよそれは！ここまできて通る訳ねえだろそんな意見！お前（ストーカー）も見たんだろ？こいつが私に痴漢したところ！」

ストーカー 「見てないです…！」

被害者 「はあ？」

ストーカー 「見てなかったです…！僕は、あなたのことをずっと見ていたのにもかかわらず…この方の痴漢の証拠に関して、何の成果も得られませんでしたあ…！」

被害者 「進撃の巨人か！」

ストーカー 「僕は…ここまで僕のことを良くしてくれた人を裏切るような…悪い人間にだけはなりたくないんです！」

被害者 「お前はもう十分悪い人間だよ！おい、さつきとこのストーカーも逮捕してくれよお巡りさんよお！そうしねえとアタイはこれから恐くて表を歩けねえよお！」

警官 「恐くて表を歩けねえ人の口調ではないけど」

被害者 「うるせえ」

警官 「それに、ですね…」

被害者 「どうしたんだよ？」

ストーカー 「ストーカーというのは実害が出ないと警察は逮捕できないんですよ。しかし僕はまだ、実害は出してない」

被害者 「ムカつくなお前！しっかりストーカーのこと調べてんじゃねえか！」

警官 「そういうことなので、私が今できるのは彼に厳重注意をすることだけなんだよ」

警官、ストーカーの方を向く。

警官 「おいキミ！もうこんなことはやめなさい！彼女が嫌がってるでしょ！」

ストーカー 「はい」

ストーカーと警官、被害者を見る。

被害者 「いやいやいや！あれで終わり！？どうせやめないよこいつは！そういう奴だよこいつは！」

ストーカー 「もう僕のことをそこまで理解してくれているんですね」

被害者 「ほらほらほら！こういう奴なんだよ！」

警官 「流石に今のはキモイぞ（ストーカーに）」

被害者 「ずっとキモイよ！最初のまともだった頃のお巡りさん帰ってきてよ！」

痴漢 「じゃあ私はもう帰って良いですか？」

被害者 「駄目だよ！あんたらなんで私が怒ってるのかわかんのか！？」

ストーカー 「それは流石に…。ヘアピンずっと返さなかったから」

被害者 「ちげーよ！！むしろもうそれはキモくていらねーよ！！！」

ストーカー 「やった」

痴漢と警官も、よかったなあお前、といった感じでストーカーの肩を叩く。

被害者 「やった、じゃねえよ！お前らも！もうホント何なんだよお前ら！お前らとこれ以上話しても埒が明かないよ！」

痴漢・ストーカー・警官 「なんかすいません」

被害者 「もうこれ以上お前らと関わりたくないよ。だから」

痴漢 「解散ですか？」

被害者 「違います。示談だよ示談。お前ら示談金出せ」

痴漢・ストーカー 「えー？」

被害者 「えーじゃねえよ。もう今回はそれで見逃してやるつつつてんだよ。私普段、セー
ルスマンやってるから、だからこれから私が普段売ってる商品出すから、お前ら
1つつつ買えよ」

痴漢・ストーカー 「はーい…」

被害者、鞆から商品を出していく。

被害者 「はいまずはこれ、水。甘い水。19800円。次はこれ、小っちゃい風船。19
800円。最後、100均の金属。19800円。ほら、早く1つつつ買いなさ
い」

痴漢とストーカー、渋々被害者にお金を支払う。痴漢↓金属、ストーカー↓水。

警官 「あの…」

被害者 「何？あんただってちゃんと私を守ってくれなかったんだから商品買いなさいよ」

警官 「普段からこの商品を買っているんですか？」

被害者 「そうだよ。自慢のラインナップだよ」

警官 「だとしたらそれ…詐欺だよ。あなた、詐欺師なの？」

間

被害者、風船を鞆に入れ、立ち上がる。

被害者 「…急にまともなお巡りさん帰ってきたな！おかえり！」

被害者、上手からはける。

警官 「待ってくださいーい」

警官、上手からはける。痴漢とストーカー、顔を見合わせる。

ストーカー 「それじゃあとりあえず…この後飲みにも行きませんか？」

痴漢 「あ、私仕事あるので」

ストーカー 「それじゃあその後」

痴漢、笑顔で頷く。

暗転。

【5幕】

明転。場所はカフェ・アラ・リーザ。
カウンター後ろでマスターが作業している。カウンター席には詐欺師、下手側テーブル席には強盗が座り、話をしている。

強盗 「へー！そんな効果があるんですね、このスーパーハッピーウォーター」

詐欺師 「少し舐めてみてください」

強盗、水をごくごく飲む。

強盗 「甘い！」

詐欺師 「はい。そしてお値段なんと18万円」

強盗 「18万円！？…妥当なお値段ですね！」

詐欺師 「しかも今なら特別価格、29800円です」

強盗 「安い！えーそんなに安くしちゃうんですか！」

詐欺師 「はい。そういうリアクションを待っていました」

強盗 「買います！」

詐欺師 「ありがとうございます！」

強盗、財布を出して詐欺師にお金を支払う。上手（入口）から空き巣が入ってくる。

マスター 「いらっしやいませ」

強盗 「あ、こっちこっち」

強盗、空き巣を下手奥のテーブル席に呼び、2人座る。詐欺師はコーヒーを飲んでいる（空き巣達には気付かない）。

空き巣 「マスター、私カプチーノ」

マスター 「かしこまりました。（裏に）カプチーノ！」

空き巣 「それで何？話って」

強盗 「いやちよつとき、これからの2人について話したくて」

空き巣 「どういうこと？」

強盗 「あのさ、俺…これから生まれ変わろうと思うんだよ」

空き巣 「うん…？」

強盗 「だから春子もさ、生まれ変わってほしいというか…もうやめてほしいんだよ」
空き巣 「…何を？」

強盗 「もう、分かってんだろう？」

空き巣 「うん…ことある事にあんたにビンタしちゃうことでしょ？」

強盗 「…確かに。それもある。やめてほしい。いやでもそのことじゃなくてさ！もっとあるだろう？大事なことが、」

空き巣、テーブルに置いてあるスーパーハッピーウォーターに気が付く。

空き巣 「あれ？それって…？」

強盗 「ああこれ？ちよつと良い買い物しちゃってさ。これね、ただの水じゃなくて、」

空き巣 「それスーパーハッピーウォーターじゃない！」

強盗 「え？春子も知ってたの？」

空き巣 「知ってるよ！（ビンタする）あんたそれ、どこで買ったの？」

強盗、カウンター席の詐欺師を指差す。空き巣と詐欺師、ゆっくりと顔を見合わせる。

空き巣・詐欺師 「げっ！」

強盗 「何？知り合いだったの？」

空き巣・詐欺師 「その節はどうも」

詐欺師 「あんたねえ！あの後大変だったのよ」

空き巣 「知らないわよ。あんたが勝手に丸まっていたのがいけなかったんでしょ？」

詐欺師 「ていうか私の商品が入ったケース鞆返しなさいよ！」

空き巣 「え？あれ？あのケース鞆…どこいったんだっけ…」

詐欺師 「はあ？何？無くしたの？」

マスター 「もしかして、これのことですか？（アタッシユケースを裏から取り出す）」

空き巣 「あ！それぞれ」

マスター 「この前、ここにお忘れになられていましたよ」

空き巣 「あのスリ事件の時かー」

マスター 「お帰りまで私が御預かりしておきますね」

空き巣 「ありがとう」

詐欺師 「いやそれ私のだから」

空き巣 「うるさいわね。というかね、あんたこそ人の旦那にただの砂糖水売りつけてんじやないわよ」

詐欺師 「砂糖？これは全て自然がもたらした甘味でーす」

空き巣 「いくらで買ったの？」

強盗 「29800円(ドヤ顔)」

空き巣 「私の時よりちょっと高く売りつけてるじゃない！」

詐欺師 「この人ならいけるなって」

空き巣 「あんなめられてんじゃん。この人そういうの騙されやすいんだから勘弁してよ。

ほら、あの人に返しな」

強盗 「でもこれ、春子にあげたいと思って」

空き巣 「え？」

強盗 「春子には、幸せになってもらいたいから」

強盗、空き巣にスーパーハッピーウォーターを渡す。

空き巣 「雄二…ありがとう。(そのままそれを詐欺師に渡す) はい、これ返品します」

強盗 「春子…！」

詐欺師 「返品は受け付けておりませーん」

空き巣 「ふざけんな！金返せ！」

強盗 「それで春子、さっきの話なんだけど」

空き巣 「こつちの問題の方が先よ！」

ストーカー、お盆を持って下手(キッチン)から出てくる。痴漢、電話をしながら下手(トイレ)から出てくる。

ストーカー 「カプチーノです」 痴漢 「はい店長、これからですね。分かりました」

ストーカー、カップをテーブルに置く。痴漢、電話を切る。ストーカー、痴漢、詐欺師の3人、顔を見合わせる。

ストーカー・痴漢 「あ！」

詐欺師 「げっ！」

ストーカー・痴漢 「その節はどうも」

詐欺師 「どうもじゃねえよ！」

ストーカー 「会いに来てくれたんですか？」

詐欺師 「ちげーよ！うわー仕事場ってここだったのかーもう最悪だよ」

ストーカー 「ういゝ(痴漢に)」

痴漢 「ういゝ(ストーカーに)」

詐欺師 「…なんで仲良くなってるの？」

ストーカー「あの後、朝まで飲み明かしたんです。その時、マスターの話もしたんですよ」
痴漢「やめろよー」

ストーカー「(小さい声で)お尻のな。お尻のな」

マスター「へー何ですか皆さん、お友達だったのですか？」

詐欺師「全然違います！」

ストーカー「まあお友達というか…未来のコレ(小指を立てる)です」

マスター「野暮でしたー」

詐欺師「だから違うわ！」

空き巣「なんか楽しそうね」

詐欺師「どこ見たらそうなるんだよ」

マスター、おもむろにテレビをつける。

ナレーター(以下ナレ)『ニュースです。先日から世間を賑わしている連続爆弾魔についてです』

マスター「中々捕まりませんねえ、犯人」

ストーカー「そうですねえ」

痴漢「…被害者もけっこう出ているみたいですよ」

ナレ『えー緊急速報です。今報道しております連続爆弾魔ですが、その爆弾魔と思われる人物が職務質問を行った警察官に対し、持っていた拳銃で発砲…』

マスター「えー…」

ナレ『重症を負わせ、現在マルハツ町内を逃走中とのことですよ』

マスター「はー…」

詐欺師「恐いですね…」

ストーカー「大丈夫。キミのことは僕が守るから」

詐欺師「ありがとう。身代わりになってくれたばってね」

ストーカー、ウザイリアクション。

強盗「大丈夫。キミ(空き巣)のことは俺が守るから」

空き巣「キモイ」

強盗「うん」

ストーカー「しかし、恐ろしいですね。凶悪な犯罪ですから」

マスター「そうですね。ガチのやつは困りますねえ。ホント、この人達はまだ可愛げのある方々でよかったです」

空き巣・強盗・詐欺師・ストーカー・痴漢「え？」

マスター「ああいやこちらの話です」

ナレ『犯人の特徴は、男性、服装、黒の手袋・黒のコート・黒のハット帽、そしてアタツシケースを持っております』

ストーカ「うわーまさに爆弾魔、つて感じですね」

マスター「うん。とても分かりやすいね」

上手（入口）から、アタツシケースを持ち、ニュースで言っている特徴通りの男が入ってくる。

マスター・ストーカ「いらっしやいませ」

男、上手側テーブル席に座る。

男「ブレンド1つ」

ストーカ「かしこまりました！」

ストーカー、キッチンへ行こうとするがゆっくり振り返る。全員、男に視線を向ける。

ナレ『繰り返します。犯人の特徴は、男性、服装、黒の手袋・黒のコート・黒のハット帽、そしてアタツシケースを持っております』

全員、互いに目を合わせたりそわそわしたりする。

ナレ『何度でも繰り返します！犯人の特徴は、男性！服装！黒の手袋！黒のコート！黒のハット帽！そしてアタツシケースを！持っております！』

※→のナレーターの説明に合わせて男、絶妙に衣類をアピールする。

間

強盗「あいつじゃねえか？」

空き巣「しー！（小声で）やめなさいよ！拳銃持ってるかもしれないんだから！大人しくしてよう？」

男「あの」

全員「はい！？」

男「なぜ全員で返事をするのですか？」

マスター「いえいえ別に、そういうところがあるんですよ、私達。ね？」

全員、苦笑いをする。

男「それでマスター、テレビ……消してもらっても良いですか？」

マスター「え、ええ……分かりました」

男「皆さんも、消しても大丈夫ですか？」

全員、首を縦に振る。

男「見ている方、いらつしやいましたか？」

全員、首を横に振る。各々、あんた見てた？というようなジェスチャーを行う。

マスター「はい、消しましたー……(テレビを消す)」

全員、スッと男の方を見る。

男「何ですか？私のようなお客は珍しいですか？」

マスター「いえいえ……そんなことは、ございませんよ」

男「でしたら、会話をしてくださいよ」

マスター「ええ。ほら皆さん、お許しが出ましたよ！会話を楽しみましょう！」

全員、ギクシヤク会話をする。しかし段々と静かになる。

男「ニュースですか？先ほどの」

間

男「まあ確かに……似ていましたよね、特徴。私と犯人の」

マスター「え？そうでしたか？」

詐欺師「何もかも違っていたと思いましたが」

ストーリーカ「そもそも僕、ニュース見てなかったな！」

強盗「そうですよ！犯人みたいに黒の手袋、黒のコート、黒のハット帽、そしてアタッシューケースを持つてる男性なんてどこにでもありますよ！」

空き巣「あんたちよつと黙ってなさい」

男「はははは。あなた面白いと言いますね？」

強盗「ありがとうございます」

空き巣「ホント黙ってて！」

マスター、電話を持って下手（キッチン）へはけようとする。

男「マスター、どこに行くんですか？」

マスター「いえ、あの、別に」

男「お電話ですか？どなたに？」

マスター「…お母さんです」

男「お母さん？」

マスター「お母さん」

男「なぜ？」

マスター「元氣かなって、思って」

男「マスター、流石に仕事中にプライベートなご連絡はやめた方が良いではありませんか？」

マスター「そう…ですよね。また後でかけ直します…」

男「はい。それで？何でしたっけ、先ほどのお話？」

空き巣「あーっと、あなたが…似ているとかいうお話でしたっけ？（その時句の有名な）さんに」

詐欺師「あ、似てるー確かに」

ストーカー「うんうん。あとは、髪型と目と、鼻と…口と輪郭を入れ替えればもう（その時句の有名な）ですよ！」

マスター「ってそれ、全整形やないかい！」

間

男「逃走中の爆弾魔に、似ているというお話でしたよね？でも私、けっこうどこにでもいると思うんですよね。全身が黒でアタッシュケースを持っている男性、でしたっけ？」

間

男「あーあと予想ですけど、こんなことも言っていたと思うんですよ。職務質問をした警察官に発砲したとか。でも、これもけっこういると思うんですよ。拳銃を持っている人というのね（懐から拳銃を取り出す）」

場、緊張感に包まれる。

強盗「ふふ。拳銃持つてる人はそんなにいないよ」

空き巣「馬鹿！馬鹿馬鹿！真面目に答えなくて良いんだよ！」

強盗「でもここはアメリカじゃないよ？」

空き巣「だから、あれはもう私は犯人ですよって自白したやつで、」

男、天井に発砲する。

男（以下爆弾魔）「ご丁寧なご説明ありがとうございます。そうです。私が世間を賑わしている、」

警官「いやーもう聞いてよ」

警官、上手（入口）から入ってくる。

警官「なんか爆弾魔がこの辺逃げてるとか逃げてないとかで、署の連中みんなピリピリしちゃってさあ。だからここに避難してきたって訳。とりあえず抹茶ラテ」

爆弾魔「ようこそ避難所へ」

警官、場の状況を理解する。

警官「さてと、油売ってないで犯人でも探しにいきますか」

爆弾魔、入口の扉を閉め、拳銃を警官に向ける。

爆弾魔「まあまあゆっくりしてってくださいよ。その犯人、案外近くにいるかもしれないよ？」

警官「あらら。（マスターに小声で）…これってそういうことー？」

マスター「まあ…そういうことでしょう」

爆弾魔「さて皆さん。私が現在逃走中の、爆弾魔です。しかし、私がここにやってきたのは偶然ではございません」

マスター「え？」

爆弾魔「先日このカフェ・アラ・リーザを利用して頂きましたが、一目見て気に入りました。常連客に溢れ、マスターなのに思わずうたた寝をしてしまう。そういうカフェ、大好きなんです」

各々、こいつ意外と分かっているな、というリアクション。爆弾魔に集まってい

爆弾魔「そんな心地の良い空間：私の爆弾で粉々にしてしまう、最高です」

全員、爆弾魔から離れて下手側集まる。

ストーカ「やっぱりただのクソ野郎だ！」

警官「じゃあおい：まさかその爆弾ってのは、その（アタッシュケース）中に…？」

爆弾魔「その通りです。爆弾はこの（アタッシュケース）中に、10個ほど」

警官「そんなに…！」

爆弾魔「まあ小型なので欠点もありますし、そこまで爆発力はございませんよ。1つの爆弾でせいぜい：ちようどこの部屋を吹き飛ばすくらいの威力、ですかねえ」

爆弾魔・空き巢以外の6人「よかったー」

空き巢「いや良くない良くない！けっこうな威力だよ！混乱してこいつ（強盗）みたいに
ならないで！」

爆弾魔・空き巢以外の6人、あわあわし始める。

空き巢「ちよ、ちよつとあんたねえ：犯罪なんて、犯罪なんてくだらないことやめなさい

よ！」

ストーカ・痴漢「犯罪なんてやめろー！」 詐欺師・警官「犯罪者はんたーい！」

空き巢「犯罪なんてやつてもねえ、いつか捕まるだけよ！」

ストーカ・痴漢「犯罪やめろー！」 詐欺師・警官「捕まるぞー！」

空き巢「この世でやつても良い犯罪なんてね：空き巢だけよ！」

詐欺師・ストーカ・痴漢・警官「なんでだよ！やつて良いのは（各々の犯罪）だけだよ！」

マスター「全部駄目ですよ」

爆弾魔「ははは！愉快な方達ですね。しかしお遊びはこの辺にして、そろそろご覧になって頂きましょう：（舞台中央まで歩く）私の可愛い爆弾達を！あれ？鍵が開いている」

爆弾魔、アタッシュケースを開ける。しかし中からは1、3幕で出てきた詐欺師の商品が出てくる。ハッピーバルーン10個が床に散らばる。

マスター「あれは：風船型爆弾！？」

爆弾魔「いや、あの、」

警官 「確かに10個くらいある！…逃げろー！」
ストーカー 「出口はあっちだー！」

マスター・強盗・ストーカー・痴漢・警官、慌てて逃げようとする。強盗、ハッピーバルーンを誤って踏んでしまう。全員、風船が破裂する音にびっくりする。

強盗 「うわー！爆発したー！」

爆弾魔 「違う違う！全然違う！あれただの風船ですから！」

詐欺師 「あれ…私のアタッシュケースだよね？」

空き巣 「あ！あなた（爆弾魔）、この前スリの時にいた男じゃない？もしかして…あの時こいつ（詐欺師）のアタッシュケースを間違えて持ってたんじゃないの？」

爆弾魔 「……」

警官 「うわーだっせえ！私の可愛い爆弾とか言って、全然管理できてないじゃん！」
ストーカー 「馬鹿だぞー！」

皆、各々に爆弾魔を馬鹿にする。

強盗 「あいつ頭悪いな〜！」

爆弾魔、天井に発砲する。

爆弾魔 「黙れ」

全員 「すいません…」

爆弾魔 「おい、私のアタッシュケースはどこにある？」

空き巣 「し、知るか」

爆弾魔、空き巣を上手に追いやり頭に拳銃を突きつける。

強盗 「春子！」

爆弾魔 「もう一度聞きます。私のアタッシュケースはどこにありますか？」

警官 「やめろ！女性に銃を向けるな！向けるんだたら…こいつ（強盗）にしたら？」

強盗 「ええ！？…分かった。銃を向けるんだたら俺にしる」

空き巣 「馬鹿！別に私は大丈夫だから！」

爆弾魔、強盗を手招きする。強盗、爆弾魔に近づく。爆弾魔、拳銃の柄で強盗の頭を殴る。

強盗「ぐわあ！（倒れる）」

空き巣「何すんの！」

爆弾魔、さらに数回強盗の頭を殴る。

空き巣「やめてよ！」

ストーカー「やめろお！！」

強盗、気絶する。

爆弾魔「私はあなたのように自己犠牲しようとする人間が大嫌いなんです。さあ、アタツシユケースはどこですか？教えて頂けないと…次は誤って引き金を引いてしま
うかも、」

マスター「ここにありません」

マスター、カウンター下からアタツシユケースを取り出す。

空き巣「マスター…」

爆弾魔「よし。ではそれを、ゆっくりこちらに渡しなさい」

マスター、「ゆっくり、ゆっくり」と呟きながら爆弾魔に近づくが、ある程度の距離になった時爆弾魔にアタツシユケースを投げつける。

爆弾魔「うわ！（ケースを受け取るが思わず拳銃を落としてしまう）」

空き巣、この隙に爆弾魔の拳銃を蹴り飛ばす。更にストーカー、アタツシユケー
スを奪う。

爆弾魔「くそどもが！それをこっちに寄せせ！」

ストーカー「バーカ！渡す訳ねえだろう！」

全員で乱暴にアタツシユケースをパスしてかく乱する。

爆弾魔「馬鹿！やめなさい！」

ストーカー「やめるかよ！」

爆弾魔 「そうじゃない！中身爆弾ですよ！？」

全員、ゆつくり丁寧に動き始め、流れるようにアタッシユケースが上手側にいる痴漢に渡る。

ストーカ 「よっしゃあ！そのまま外へ捨てちまえ！」

痴漢 「はあーまったく…何をやっているんですか」

痴漢、アタッシユケースを爆弾魔に渡す。

ストーカ 「は？」

痴漢 「店長」

爆弾魔 「ふふふ。良いタイミングでのアシストでしたよ」

痴漢、床に落ちている拳銃を拾う。

ストーカ 「何やってんだよ…お前？」

痴漢 「ごめん、店長の言うことは絶対だから」

ストーカ 「そうじゃなくて！なんでこいつの味方してんだよ！」

痴漢 「私は自らの意志で店長に従っているだけだよ」

爆弾魔 「そういうことです。彼は私の忠実な部下。私のお店のただのバイト君ではない。

彼は私の行いに共感して、」

痴漢 「店長は本当に…良いお尻をしているから」

全員、痴漢に顔を向ける。

爆弾魔 「うん？」

痴漢 「私はいつかあれを自分のものにした…だから私は！」

爆弾魔 「ちよ、ちよ、ちよっと良いですか？お尻？良いお尻なんですか、私ののは？」

痴漢 「最高です」

爆弾魔 「あーあなたは、私の犯行に共感をしてきて…？」

痴漢 「あ、そういうのじゃないです」

間

爆弾魔 「はい、気持ち整理しました。とりあえずこの話は終わってからにしましょう」

痴漢 「はい！（嬉しそうに）」

爆弾魔 「いや別に受け入れた訳ではないですよ」

ストーカー 「お前……！」

爆弾魔 「さあ無駄話はこれくらいで良いでしょう」

痴漢、爆弾魔に拳銃を渡そうとする。

爆弾魔 「いえ、それはあなたが持つていなさい。私はこれから爆弾を1つ取り出し、時限装置を起動させます。あなたは邪魔しようとする者がいたら引き金を引きなさい」

痴漢 「……はい（拳銃を構える）」

ストーカー 「やめろお！」

爆弾魔 「皆さん、爆発までの時間は5分です」

ストーカー 「短いぞお……！」

爆弾魔 「私はここであなた達の怯える顔をずっと見ています」

ストーカー 「見るなよ……！」

爆弾魔 「勿論逃げ出そうとする者は（拳銃を見る）どうなるか分かりますね？」

ストーカー 「撃たれるってことかなあ……！」
爆弾魔 「そして爆発まで残り10秒になりましたら……ここを出しましょうか、私達（痴漢）は」

ストーカー 「期待しちまったあ……！」

爆弾魔 「ああ、心配なさらず。爆発に巻き込まれても死ぬことはないでしょう。一生消えない火傷痕が残るだけです」

ストーカー 「それはけっこう悲惨だぞお……！」

爆弾魔 「そしてその傷跡を見る度に……今日の出来事を鮮明に思い出して、くださいな」

ストーカー 「変態野郎があ……！」

爆弾魔 「さつきから煩いですなああなた！ずっと！あなたにもね、そこで倒れている男（強盗）のように……大事な人、いるんでしょう？」

ストーカー 「何？」

爆弾魔 「先ほどからずっと気にかけていますよね、あの人（詐欺師）のこと。私そういうのに敏感なんです」

詐欺師 「何々？嫌な予感するよ」

ストーカー 「やめろ……！」

爆弾魔 「彼女さん、ですよね？」

詐欺師 「違います」

ストーカー 「違う！」

爆弾魔 「まあ、そういうことにしておきましょうか」

詐欺師 「ホントに違うからね？流れるにそんな感じになっちゃってるけど」

ストーカ 「彼女に手を出すな！（嬉しそうに）」

詐欺師 「少し嬉しそうにしてんじやないよ」

爆弾魔 「あなたが騒いでいたのがいけないのですよ。まあ安心してください。殺す訳ではありません。ただ絶対に逃げられなくするだけです」

爆弾魔、手錠を取り出し、詐欺師とテーブルに手錠をかける。

詐欺師 「えー！？」

ストーカ 「ごめん…僕のせいで」

詐欺師 「ホントだよ！とんだとばっちりだよこれ！」

爆弾魔 「さて。それではそろそろご開錠といきますか」

爆弾魔、顎で痴漢に指示を送る。痴漢、銃を皆に向ける。

ストーカ 「お前は…本当にこれで良いのか？」

痴漢 「…当たり前だ」

ストーカ 「本当にそうなのか？本当にこの爆弾魔の、お尻が最高だった？」

痴漢 「…何が言いたい？」

爆弾魔 「うん？」

ストーカ 「本当はお前だって気付いているんだろう？」

痴漢 「やめる…」

ストーカ 「ただ認めたくないだけだ…！」

痴漢 「やめる…！」

ストーカ 「マスターのお尻だって最高だったことに！」

痴漢 「やめるー！！」

マスター 「急に話こつちきた…」

空き巢 「怖い怖い…何あいつら」

警官 「元々ああいう人達ですよ」

詐欺師 「いや前より酷くなってる気がする」

ストーカ 「お前はそれを認めることで…店長だけ見てきた今までの自分を否定してしまうと、恐れているだけだ！」

痴漢 「ううう…！」

ストーカ 「それに倒れているこいつ（強盗）だって！良い尻をしている！」

痴漢 「くそお！！この町は良いお尻ばかりだ！私を惑わせる！店長…！私はどうした

ら…?」

爆弾魔 「知りませんよ!」

痴漢 「お尻だけに?」

爆弾魔 「やかましいわ。もうあなたはいいです」

爆弾魔、拳銃を痴漢から取り、ストーカーに向ける。

爆弾魔 「戻れ!」

ストーカー、下手側に戻る。

爆弾魔 「さて、茶番も終わりました。今度こそ本当に…開錠のお時間です!」

爆弾魔、アタツシケースを開けようとするが、ポケットに鍵が無いことに気付く。

マスター 「どうしたんだ…?」

爆弾魔 「鍵が…無い」

マスター・空き巣・ストーカー・詐欺師 「え?」

警官 「ふっふっふ。爆弾魔さん、お探しの物は…これかな?」

警官、スニッカーズを取り出す。

音響 『おー!スニッカーズ!』

ストーカー 「(ポケット等を探す) 僕のスニッカーズがまたなくなってる!」

警官 「違う違う!…こつちだ! (鍵を取り出す) さっきケースを投げ合っている時、ポケットからちよいと拝借させて頂きましたよ」

マスター 「流石です!」

爆弾魔 「それを渡さないと、」

爆弾魔、警官に拳銃を向けようとするが、それより早く警官、鍵を飲み込む(マム)。

警官 「渡さないと何だよ?もうこれで爆弾は恐くねえなあ! (懐から拳銃を取り出し、

爆弾魔に向ける) さあ、その拳銃を降ろして、大人しくお縄につきな」

痴漢 「店長…」

爆弾魔 「くそ……こんな奴らに……！」

場、静まる。すると『チックタック』という音が聞こえる。

マスター 「あれ？何か『チックタック』という、まるでどこかで時限爆弾が作動しているような音が聞こえませんか？」

爆弾魔 「まさか……！」

爆弾魔、アタッシュケースに耳を当てる。

爆弾魔 「…爆弾が、起動しているよ☆」

全員 「えー！？」

空き巢 「なんで……！」

爆弾魔 「あなた達がさつきあんな乱暴に扱うからー！爆弾はデリケートなんだよ！馬鹿！馬鹿馬鹿！」

警官 「どどどどどどどどどうしよう？」

マスター 「ピグレットみたいになってますよ」

爆弾魔 「しかもこのままだと中に入っている10個の爆弾全てが爆発してしまいます……！この店周辺が吹っ飛びますよ……！」

全員 「はあー！？」

爆弾魔 「そして爆発まで……おそらく3分といったところでしよう……！」

全員 「ひょえー！？」

舞台上に電工文字（映像もしくはフリップ、紙等）で3分という時間が出て、時間が経つにつれ文字が減っていく。

マスター 「何か良く分かりませんが、残り時間が表示されている気がします！」

警官 「おいおいおいおい！」

ストーリーカ 「ふざけんな！」

空き巢 「誰か早くどつか持って行きなさいよ！」

警官 「外で爆発させる訳にもいかねーだろ！」

空き巢 「じゃあどうすんのよ！」

全員、ワーワーギャーギャー騒ぐ。

詐欺師 「……ていうか誰か手錠外してー！」

爆弾魔 「付き合ってもらえません…！私は…逃げますよ！」

爆弾魔、走って上手からはけようとする。その瞬間、上手入口の扉が勢いよく開き、爆弾魔にぶつかる。倒れて気を失う爆弾魔。食逃げ犯が現れる。

食逃げ犯 「こんにちは〜」

音響 『おー！ヨネ婆さん！』

全員 「ババア！」

食逃げ犯、ゆっくりテーブル席に移動する。

食逃げ犯 「とりあえず抹茶ラテ」

詐欺師 「いやいやヨネさん！今そういう状況じゃないですから！」

食逃げ犯 「うん？どうしたんじゃ？」

詐欺師 「爆弾！そのアタッシュケースに入ってる爆弾が爆発するんですよ！」

食逃げ犯 「ヤベーじゃねえか！とんだアクシデントじゃねえか！」

マスター 「皆さん…逃げられる人は、逃げてください」

全員 「え？」

ストーカ 「マスターは？」

マスター 「私はここに残って、この爆弾を止めます」

全員 「ええ？」

マスター 「そしてここで動けない人達（強盗、詐欺師、爆弾魔）を助けます。このカフェの大事なお客様ですから。勿論、このお店も守りたいですし」

詐欺師 「マスター…ありがとう」

空き巣 「あのねえ！私だって、この人（強盗）置いていく訳にはいかないんだから！爆弾止めるの手伝うわよ」

ストーカ 「僕だって守ります！彼女もこのお店も！」

痴漢 「私も店長を見捨てる訳にはいきませんから」

警官 「それじゃあ私は逃げます」

食逃げ犯 「空気を、読めい！」

マスター 「皆さん…。しかし本当に時間が無くなったら、逃げてくださいね！」

全員、頷く。

マスター 「とはいえ、どうすれば…？」

痴漢 「私、この中の起動中の爆弾を見られれば、必ず止められます。爆弾のことは店長

から教わっているのぞ」

マスター「つまり、アタツシケースを開けられれば良い訳ですね。しかし鍵が…」

警官、すまねえという顔をしている。

空き巢「おいおい、鍵開けは私の専売特許だぜ。理由は聞いてくれるな。誰かなんか細い金属かピンみたいなの無い？」

詐欺師「…それだったら、私の商品ケースの中に入ってるはず！」

空き巢「あ！ハッピーメタル…なんちゃらね！」

空き巢、アタツシケースを調べる。

詐欺師「その後は私の手錠をお願いね」

空き巢「…あれ？1本しかないの？鍵を開けるためには細い金属が2つ必要なの！固定したピンを回すやつが！」

詐欺師「あ！あんた（痴漢）この前買ったでしょ！？」

痴漢「今持つてる訳ないじゃないですか」

ストーカー、ジップロックを取り出し、中からヘアピンを出す。

ストーカー「家宝だけど、仕方ないな」

痴漢・警官「おー！ヘアピン、イン、ジップロック！」

空き巢「でかした！あとは任せて！」

空き巢、アタツシケースの鍵開けを始める。

痴漢「まさか今日も持っているとは。流石の執着心だな」

ストーカー「これは、僕達の愛が起こした奇跡…ですね」

詐欺師「今回は何も言えねえ…」

残り時間40秒を切る。

警官「まだなのか！？」

空き巢「あともう少し…これを…こうやって…よし！開いた！」

空き巢、アタツシケースを勢いよく開ける。

全員「やった！」

全員、痴漢を見る。

痴漢「あ。これどれが起動している爆弾か分かりませんね」

全員「はあー！？」

警官「ふざけんなー！なんとかしろー！！」

警官、痴漢を掴んでぶんぶんする。

空き巣「水とか掛けたら止まらないの！？」

痴漢「確かに威力を高めるために爆薬をむき出しにしているので、水をかければ湿気らせられます」

警官「よし水だな！マスター！」

マスター「聞こえてますよ！」

空き巣・ストーカー・食逃げ犯「水！」

マスター、キッチンへ走り出す。空き巣・ストーカー・食逃げ犯も各々走り出す。

痴漢「あ、でも駄目だ。普通の水では回線がショートして爆発してしまいます」

警官「はあ！？」

痴漢「電気を通さないで、爆薬だけ湿気らせる水じゃないと」

警官「そんな都合の良いものあるかー！」

空き巣・ストーカー・食逃げ犯、各々のスパーハッピーウォーターを取り出す。

痴漢「あります。それは…」

空き巣・ストーカー・食逃げ犯、水を爆弾にかける。

警官「掛けちゃあ駄目だー！！」

痴漢「砂糖水です」

爆弾、残り時間0秒になっても爆発しない。

警官「…あれ？」

痴漢「それ、砂糖水だったみたいですね」

間

詐欺師「ばれたか」

全員「やったー！！！！！」

全員喜ぶ。痴漢、マスターのお尻を触る。

マスター「うわあ！どさくさに紛れて触らないでください」

痴漢「98点」

爆弾魔と強盗、目を覚ます。全員、それに気づく。

全員「どーん！！」

爆弾魔・強盗「うわあ！！（抱き合う）」

警官「さ、お疲れ様、爆弾魔君。逮捕の時間だ」

爆弾魔「ち、畜生…！！」

爆弾魔と警官、上手からはける。空き巣、詐欺師の手錠を外す。

空き巣「は…：ホント疲れた…」

詐欺師「まだドキドキしてる…」

マスター「皆さん、今日は誠にありがとうございました。皆さんのおかげでこのカフェ・アラ・リーザは救われました」

強盗「いやいやーそんなことないですよ」

空き巣「お前は本当にそんなことないからな。寝ただけなんだから」

マスター「しかしこの方が倒れていたから、あなたはここに残り、爆弾を止めようとしてくれたのですよね？」

詐欺師・ストーリーカ・痴漢・食逃犯「ふう〜！（茶化す）」

空き巣「うっせえなお前ら！」

マスター「今回の出来事は…皆さん1人1人の力があつたからこそ、乗り越えられたのだと思います」

痴漢「はい。私のお尻に対するひたむきさが力となりました」

ストーリーカ「いやお前は爆弾の知識のことだろ。僕は、（ヘアピンを持つ）愛の力だけだ」

マスター「しかし、その力を誤って使ってはいけません」

詐欺師、ストーカーを見る。

マスター「爆弾魔の彼のように、なつてしまいますから。彼だつてあんな爆弾を作れたのです。その道に進めばきちんと評価されていたでしょう」

痴漢「そうだったのかも…しれません」

マスター「良いことも悪いことも返ってきます。因果応報、やったらやり返される、当たり前です。犯罪だつてそうです。いつか必ず自分に返ってきます。断言します。それは必ず、です。…だから、償ってください。どこかで理不尽に返つてこないために、償ってください。そして真つ向から堂々と、自分の力を発揮できるように、なってください」

食逃げ犯「償う、か。ほつほつほ。まるでワシらが犯罪者のような言い方じゃのう、マスター？しかし、お主の言い分は良く分かる。仮にお主らがそうじゃつたとして、まだ引き返すことは十分可能なんじゃ。そうじゃろう？真つ当な人間になろうとすると、そこのお主よ？」

強盗「気付いてたんですね…」

食逃げ犯「あんなマスク1つじゃ簡単に見破れるわい」

強盗「マスター、俺も…そう思います。本当にその通りだと、思います。だから俺は、いや、俺達は、償いたい…！春子、さっきの話。俺さ、お前にやめてもらいたいことがあるんだ」

空き巢「うん。雄二私さ、きつと一生それやめられないんだな…って思つててさ」

強盗「春子、そんなこと言わないでさ、」

空き巢「でもさ、私さ、今あなたに言われたら、なんか別にやめても良いなつてなつたんだよね」

強盗「え？」

空き巢「多分私さ、あなたに言われたかつたんだと思う。やめてくれて」

強盗「どういうことそれ？」

空き巢・強盗以外の5人、やれやれというリアクション。

空き巢「は…：あなたは肝心なところで…。やっぱ私がしつかりリードしないとね」

強盗「今後ともお願いします」

空き巢、詐欺師にスーパーハッピーウオーターを渡す。

空き巣「これ、なんか飲まなくても効果あるみたいよ」

詐欺師「みたいですね」

空き巣「何？なんか嬉しそうだけど」

詐欺師「うん。私、今ハッピーなんだ。だって初めて私の商品が人の役に立ったんだから！こんな気持ちになれるんだったら、もっと初めから…なんて。だから今度は（マスターを見る）真っ向から堂々と、もっと人の役に立つ、ためになる物をお届けしてみせようって決めました！ちゃんと…償ったあとに」

ストーカー、じっと詐欺師を見つめている。

ストーカー「あの…今まで本当にすみませんでした！本当は気付いていました。自分のしていることが、いけないことだつてことに。だけど自分に気付いてないフリさせて、それでどんどん空回りしていつて…ちくしょう…！でもあなたと同じように！今度は僕も真っ向から堂々と！あなたと向き合いたいです！だから…僕が償ったあとは…まずはお友達から如何でしょうか！？」

詐欺師「それは無理、流石に」

ストーカー、ウザいリアクション。痴漢、ストーカーを慰める。

痴漢「まあ今度一緒に痴漢しよう」

詐欺師「やめろよ」

痴漢「冗談ですよ。私も、店長と一緒に償います。なんだかんだ店長にはお世話になりましたから。そして今度は店長と一緒に、社会に真っ向から証明してやります。店長がすごいのはお尻だけじゃないんだぞ、つて」

食逃げ犯「うむうむ、お主らはそれで良い。ワシにはもう遅い。ワシがその道を歩むことは、今までの人生を否定することと同じじゃからのう…」

マスター「お婆さん…」

食逃げ犯「じゃが…残りの人生くらい、真っ当なセカンドライフを送るのも…悪くないかもしれんな」

マスター「はい」

食逃げ犯「さらばじゃ若者達よ。もう会うこともないじゃろう」

食逃げ犯、上手からはける。

強盗「それじゃあマスター、俺達（空き巣）…これから行かなきゃならないところがあるから」

マスター、深く頷く。

ストーカー「すみませんマスター。ちよつとの間、バイト来られなくなってしまいました」

マスター、何度も頷く。

痴漢「今度は、店長と一緒に来ます」

マスター、親指をグツと立て頷く。

詐欺師「このお店…なくさないでよね、マスター」

マスター、ゆつくり頷く。5人、はげようとす。

空き巣「そうだマスター。今日のお会計、」

マスター、手でそれを止める。

マスター「今日は、ツケておきますよ。ですから皆さん…また、お待ちしております」

全員、マスターにお辞儀をする。

徐々に暗転。

【エピソード】

明転。場所はカフェ・アラ・リーザ。
薄暗い雰囲気。鈴虫の鳴き声（夜の音声表現）。カウンター後ろにはマスターが立っている。上手から警官が入ってくる。

警官 「どうも」

マスター 「ご苦労様」

警官 「いやいやこちらこそ。今日はお疲れ様でした」

警官、カウンター席に座る。

マスター 「本当にね。今回の犯人役…名演技だったよ。久しぶりに疲れちゃった」

警官 「いやー俺もです」

マスター 「いくら今ニュースになっているからって、犯人役の役者さんがまさか爆弾魔で来るとは思わなかったよ」

警官 「ははは」

マスター 「どうかぶつちやけあの役者さん、ちょっとやり過ぎじゃなかった？初めての人？」

警官 「そうですねー。後で雇ったやつに言っておきますよ」

マスター 「それで、皆さんは無事に？」

警官 「ええ。あの婆さん以外、全員署に自首しに来ましたよ」

マスター 「それはよかった」

警官 「はい」

マスター 「キミは自首しないの？」

警官 「ええ？」

マスター 「まったく…キミも早くスリやめなよ」

警官 「大丈夫です。俺は犯罪者相手にしかスリをしませんから」

マスター 「いや関係ないからそれ。どうかこの前、私の財布も盗ってたよね？」

警官 「やだなーあれは冗談みたいなものじゃないですか。後でちゃんと返しましたし。いやでも流石マスターですね。あの後ちゃんと5人を自首させたんですから。一体どんな魔法の言葉を使ったんです？」

マスター 「別に、そんなたいしたこととは言っていないよ」

警官 「でもほら、マスターの言葉にはなんか…説得力みたいなのがあるから」

マスター 「そうかい？」

警官 「そうです」

マスター「まあでも、そもそも彼らはそこまで悪い人間じゃないんだよ。犯罪をやめる、何かきつかけみたいなのが欲しかっただけなんだ」

警官「だからこそ我々は犯人役雇って、何も知らない犯罪者達巻き込んで、今日みたいな大々的なお芝居をやっているんですけどね。犯罪者達に、客観的に犯罪を見てもらう機会をね。本当にいつもいっつもご協力、感謝致します」

マスター「ううん。私は少しでも彼ら犯罪者が、自分達を見つめ直すことに協力してあげただけだから」

警官「頭、下がりますよ」

マスター「案外もしかしたら…あのお婆さんもこれから、私達のように犯罪者を更生させるようになるかもね」

警官「え？」

マスター「なんかそんな気がしてね」

警官「だと良いですけど」

マスター「それで、次はいつになりそうなんだい？」

警官「そうですね…今、犯罪者だと思われる5人にこのカフェについて色々刷り込んでいるので、このまま順調にいけば3カ月後…とかですね」

マスター「分かった」

警官「もうしばらくしたら、ちらほらここに顔を出すんじゃないですか？これ、リストです」

警官、マスターに犯罪者リストを渡す。

マスター「うん。そういえばあの後、犯人役の彼とキミはどうしたの？」

警官「いやそれがちよつと聞いてくださいよ」

マスター「何？また変なことしたの？」

警官「近くにたまたまこの話を知らない新人の部下がいたんでね、騒ぎになってる爆弾魔を捕まえたって言ってそのままそいつに渡しちゃいました。ははは」

マスター「やめなよそういうこと。どっちの人もパニックになったよ、きつと」

警官「まあ署に行けば事情知ってる人いますから」

マスター「あ、そうだ」

警官「何です？」

マスター「一応1つ確認しておきたいことがあってさ」

警官「はい」

マスター「痴漢していた彼、犯人役の爆弾魔と知り合いみたいだったけど、あれはキミ達の仕込みだったんだろう？」

警官「え？」

偽爆弾魔、上手（入口）から勢いよく入ってくる。

偽爆弾魔「金を出せ！強盗魔だ！間違った！爆弾魔だ！大人しくしろ！」

間

マスター・警官「は？」

偽爆弾魔「あれ？人少ねーな」

マスター「どなたですか？」

偽爆弾魔「爆弾魔だよ爆弾魔。ニュースでやってんだろ？」

マスター・警官「え？本物？」

偽爆弾魔「そうだ。本物だ本物。というか客いねーな」

マスター「それはまあもう夜の11時なので。お店も閉まっていますので」

偽爆弾魔「あれ？聞いてた話と違うなー。あ！もしかして、夜の11時じゃなくて、昼の11時ってこと？」

警官「さっきから何の話？」

偽爆弾魔「あなた達、マスターと斉藤さんですよ？でしたら聞いているはずだと。俺は、今日来る予定でした、犯人役の、爆弾魔ですよ！」

マスター・警官「は？」

偽爆弾魔「いやー昼の方でしたかー。まあ良く考えてみればそうですよね！申し訳ないです！芝居はまた後日ってことで！」

じつと動かない2人。

マスター「あなた（警官）：今日来る役者さんの顔、知ってた？」

警官、首をゆっくり横に振る。

偽爆弾魔「どうしたんですか？」

マスター、ゆっくりテレビを付ける。

偽爆弾魔「あ、なんか見るんすか？」

ナレ『えー本日警官に発砲した爆弾魔ですが、今日昼過ぎ、無事新人警官によって逮捕されました。犯人は今日朝方警官に発砲後、マルハツ町のカフェ・アラ・リーザ

というカフェに逃げ込んでおり…』

マスターと警官、顔を見合わせる。

偽爆弾魔 「えー？本物の爆弾魔捕まっちゃったの？」

マスター 「ということは…先ほどの爆弾魔が…」

警官 「本物…？」

偽爆弾魔 「じゃあ流石にもう爆弾魔はできないな。私は何役でいきましようか？」

マスター・警官 「えー…！？」

偽爆弾魔 「どうしたどうした？そんなに犯人役は爆弾魔がよかったですか？」

マスター 「あの爆弾とかも！？あの爆弾とかも！？本物！？」

警官 「うわー！知ってたら本当に逃げてたよー！」

マスターと警官、2人であわあわしている。徐々に暗転。

ナレ『そして、本日はさらに同じ署に5人の自首者が現れました。なんと彼らも爆弾魔と同じカフェからやってきたと供述しております』

偽爆弾魔 「あれ？そういえばこのカフェの名前って…？」

完全暗転。

ナレ『そのカフェの名前、もう一度申し上げます。カフェ・アラ・リーザ、です。この名前、イタリア語で【自首させるカフェ】という意味で…』

(終)